

〔研究ノート〕

後期古墳時代有吉遺跡の研究

雨宮 龍太郎

挿図目次

第1図	有吉遺跡の後期古墳時代遺構	243
第2図	第I期の杯と住居跡	246
第3図	範疇間の土器移動(第I期)	247
第4図	第II期の杯と住居跡	250
第5図	範疇間の土器移動(第II期)	253
第6図	C型土師器の生成過程(1)	254
第7図	II- α 内部の土器の移動	254
第8図	第III期の杯と住居跡	258
第9図	非有吉系須恵器の型式変遷	259
第10図	C型土師器の生成過程(2)	259
第11図	C型土器の生成過程(3)	259
第12図	第IV期の杯と住居跡	261
第13図	C型土師器の生成過程(4)	263
第14図	範疇間の土器移動(第IV期)	264
第15図	第V期の杯と住居跡	266
第16図	C型土器の生成過程(5)	267
第17図	第VI期の杯と住居跡	270
第18図	第VII期の須恵器	271
第19図	有吉遺跡を中心とする移住例集成	273

表目次

第1表	杯の時期別・住居跡別分布表	242
第2表	住居跡群の土器様相(第I期)	247
第3表	住居跡群の土器様相(第II期)	251
第4表	住居跡群の土器様相(第III期)	258
第5表	住居跡群の土器様相(第IV期)	262
第6表	住居跡群の土器様相(第V期)	267
第7表	住居跡群の土器様相(第VI期)	270
第8表	有吉遺跡の時期区分	272
第9表	有吉遺跡を中心とする移住例集成	274

1. はじめに

古代のものを古代人の眼で見るということがどれ程至難の業であるかについてはよく知られているが、その意味する所は二重になっている。第1の意味は現代の諸科学、とりわけ近代西欧で育まれた諸科学の概念を安易に非西欧の古代世界の研究に持ち込むことを戒めているのだが、第2の意味はもう少し複雑である。それは純粹に学問だけのために生み出された概念ではなく、日頃私たちが普通に使用している言葉を、安易に学術的な文脈の中に取り入れることを戒めているのである。小論の課題に即して言えば、〈村落〉・〈集落〉・〈ムラ〉・〈家族〉・〈イエ〉等の言葉がこれに相当する。これらの言葉は古代社会にも外見上似たものがあるので、どうしても使用しがち、しかも多用しがちになる。しかしそれらは中・近世社会を論じる際に概念的にも印象的にも最も適切な用語となるが、古代社会を論じる際にはできるだけ使用を謹んだ方が望ましい。実態に即した帰納的な分析をしている時にも、これらの言葉を使用したために、あと一步のところで言葉の持つニュアンスに古代特有の真相が隠されてしまうこともあり得るからである。今回はこの中では最も歴史的色彩の薄い〈集落〉を、ためらいながらも学術的な文脈の中で使用している。普通〈集落〉とは景観的にも社会的にも比較的完結した世界であると思うが、小論で取り上げた古代〈集落〉は景観的にはともかく、社会的には全く完結していないのである。他に適当な用語を探し出せなかったため、便宜的にもせよ使用せざるを得なかったが、それによって古代的個性が中世的あるいは常識的な解釈の中に無意識のうちに解消されてしまっている部分は決して小さなものではないであろう。〈集落〉や〈村落〉という言葉は生産の現場と居住地点を切り離したり、その関係を曖昧なものにしている点が小論にとって不適当なのである。古代の在地社会を論じる際には、居住地点と生産の現場が切り離せない関係で表現されている概念が必要である。より具体的に言えば、水田化された一筋の谷津を中心に、そこに生活の基盤を置く人々の居住地域までも含み込んだ言葉が欲しいのである。

2. 方法論

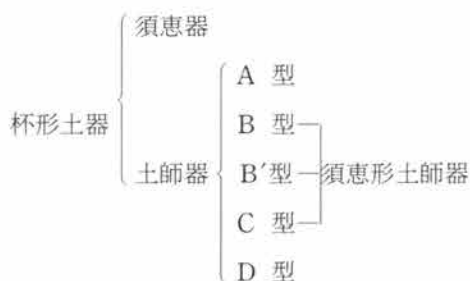
千葉市南生実町に所在する有吉遺跡は、過去3次にわたって発掘調査が実施された、後期古墳時代から平安時代にいたる大集落跡である。とりわけ後期古墳時代に属する竪穴住居跡の検出例数では村田川下流域の諸集落跡中有数の遺跡であり、まだ一部に未調査区域を残しているが、当該期の集落構成史を復原するためには絶好の研究素材となる。さらに周辺には椎名崎・木戸作・ムコアラク・大厩等の後期古墳時代集落跡が点在し、それらの調査成果が明らかなので、有吉遺跡の分析は単独集落の構成史のみにととまらず、村田川下流域という小地域社会論

への展望を拓くためにも不可決な作業といえよう。

分析に使用する資料は竪穴住居跡と杯形土器である。後期古墳時代の杯形土器（須恵器・土師器）は比較的短期間に形態の変遷が認められ、なおかつ各種土器中最も多量に検出されるもので、杯形土器そのものおよびそれを出土した遺構の編年資料として最も適している。さらにまた杯形土器中でも土師器製品は時間の推移に伴って変化するばかりでなく、同時期であっても出土地点を異にすることによってその形態が大きく異っている場合がある。このことはそれらの使用集団の個性の多様性を反映しているものと考えられる。この時代の杯形土器が持つ時間と空間にたいする敏感な可変性を客観的かつ徹底的に把握して、有吉遺跡の載る台地上に展開された人間活動の具体相の一端を垣間見ようというのが小論の方法である。

(1) 杯形土器の分類

このような杯形土器の可変性を具体的に把握するために次のような分類基準を設定した。



杯形土器は須恵器と土師器とに大別される。須恵器は形態的には和泉陶邑窯の製品と変わらない。しかし一口に陶邑製品と言っても同時期中にいくつかの形態変異が認められ、その中のあるものは有吉遺跡からは検出されず、その周辺の椎名崎遺跡や木戸作遺跡から出土している。土師器は須恵器の影響を受けない土師器本来の類型（A・D型）と須恵器の影響を受けた須恵形土師器（B・B'・C型）とに分類される。A型は後期古墳時代前半期に普遍的で、しばしば赤彩された有頸または無頸の椀形品である。B型は後期古墳時代を通して存在した有吉遺跡出土須恵器を比較的忠実に——モデルとなった須恵器の型式的特徴がうかがえる程度に——模倣した器形で、古いものはしばしば赤彩される。また須恵器ではなくB型土器を模倣したために、器肉が厚くなり、細部の形状が本来の須恵器モデルとは異なる資料が散見される。しかしこの類型はB型土師器との客観的な識別法が見当たらないために、ここではB型類型に含めて分類した。B'型は後期古墳時代の一時期（第III期）に見られる。有吉遺跡からは検出されない器形の須恵器を比較的忠実に模倣した器形である。この類型はモデルとなる須恵器の系統の変遷——とくに蓋形について——に不詳の部分があり、身形のみしか識別できなかった。しかし今後周辺の遺跡の調査研究が進展すれば、この不詳部分はおそらく解明されると思われる。その際に

は今回はC型に含めた資料の一部がこの類型に含まれる可能性がある。C型は後期古墳時代後半期に普及した。須恵器からの影響を受けながらも須恵器の模倣ではなく、土師工人の独創によって生み出された器形で、蓋形の方に顕著に現われる。この類型の祖型品は古墳時代前期に遡る埴形土器や須恵器等多様である。D型は後期古墳時代後半の一時期（第IV期）に現われる、手づくね風の鉢形を呈する器形である。

(2) 杯形土器の編年

周知のように後期古墳時代の杯形土器には須恵器と土師器がある。杯形土器の編年に際してはまず須恵器を編年し、それらに伴出する土師器をそれと同時期ないし近似する時期の所産として須恵器と土師器のおおよその併行関係を把握した。須恵器の編年には和泉陶邑窯での成果を全面的に援用している。その理由は陶邑編年が後期古墳時代を欠期なく、また時代的にキメ細かく網羅していることと、有吉遺跡出土須恵器が陶邑で生産された須恵器と形態的に酷似し、形式的な共通性を充分認めることができるためである。なお須恵器はすべての住居跡から検出されるわけではなく、多くの住居跡が土師器のみで構成されているが、このような住居跡では須恵器を忠実に模倣したB型土師器の存在が編年作業上須恵器と同様な機能を果たしている。こうして須恵器と土師器のおおよその併行関係を確認した後に、土師器の形状の多様性に対処するために、後述する住居跡群の確定作業中に最終的な調整を行った。

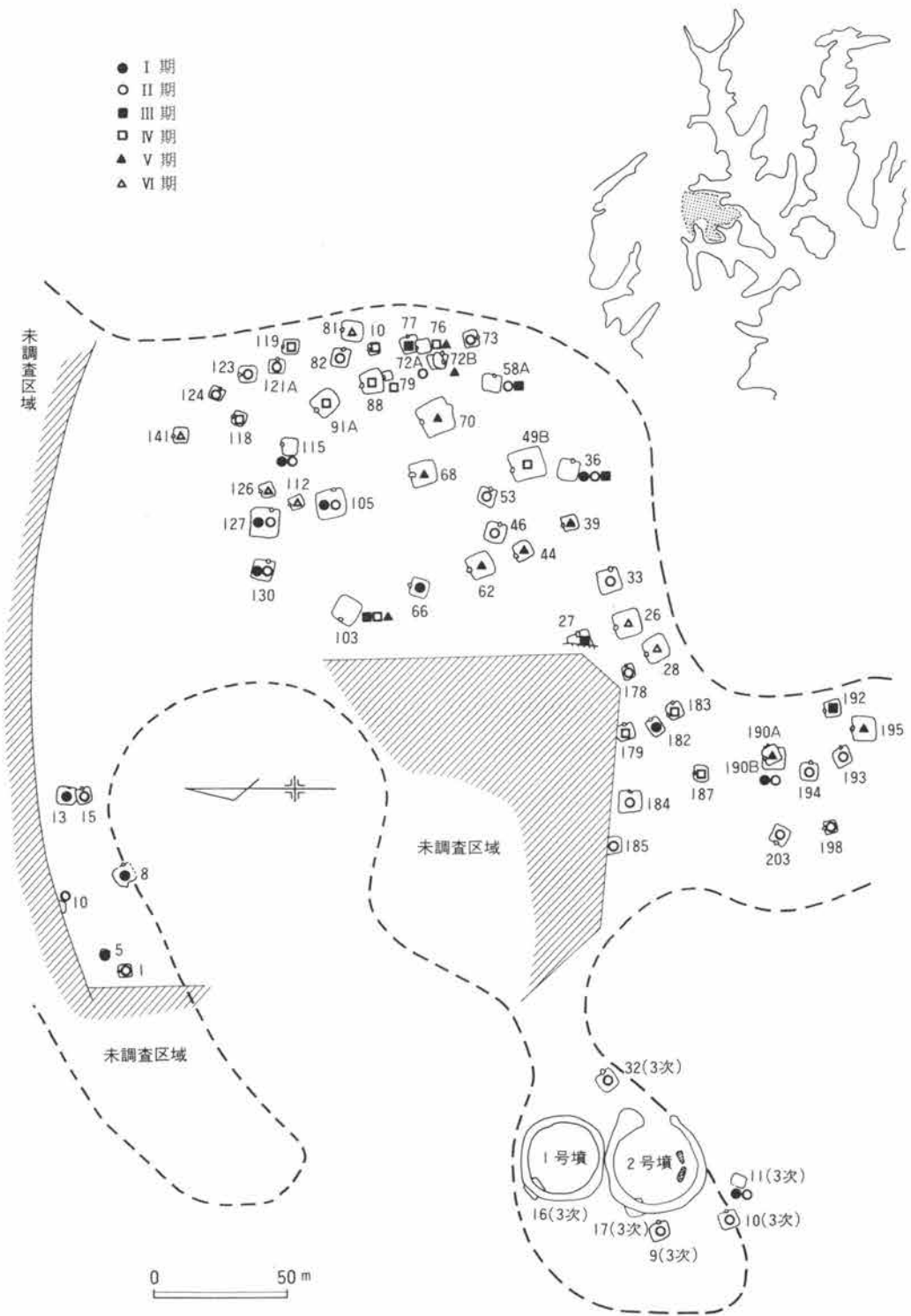
(3) 住居跡と住居跡群

有吉遺跡における後期古墳時代に属するすべての杯形土器について前記のような編年を行い、住居跡別に集計したものが第1表である。杯形土器を出土しない住居跡については他器種土器や周囲の住居跡との配置関係等を考慮に入れて帰属時期を判断した。該当する住居跡は66基である(第1図)。第1表からは住居跡の存続期間に関する次のような諸類型を読みとることができる。

- ① 単一時期に属する杯のみを出土する住居跡
- ② 連続する2時期に属する杯を出土するが、一方がきわめて少数で——しばしば1個体——数量上不均衡な住居跡
- ③ 連続しない2時期に属する杯を出土するが、一方がきわめて少数で数量上不均衡な住居跡
- ④ 連続する2時期に属する杯を出土するが両者が数量上均衡がとれているか、それに近い住居跡
- ⑤ 連続する3時期に属する杯を出土するが、3者が数量上均衡がとれているか、それに近い

第1表 杯の時期別・住居跡別分布表

	I	II	III	IV	V	VI	VII	備考		I	II	III	IV	V	VI	VII	備考
1	・	・	・	・	・	・	・	I	105	4	2	・	・	・	1	・	I～II
5	3	・	・	・	・	・	・	I	112	・	・	・	・	・	1	・	VI
8	2	1	・	・	・	・	・	I	115	5	3	・	・	・	・	・	I～II
10	・	2	・	・	・	・	・	II	118	・	・	・	4	・	・	・	IV
13	5	1	・	・	・	・	・	I	119	・	・	・	2	・	・	・	IV
15	・	・	・	・	・	・	・	II	121A	・	1	・	・	・	・	・	II
26	・	・	・	・	・	1	・	VI	123	・	2	1	・	・	・	・	II
27	・	・	4	・	・	・	・	III	124	・	1	・	・	・	・	・	II
28	・	・	・	・	・	・	・	VI	126	・	・	・	・	1	1	・	VI
33	1	1	・	・	・	・	・	II	127	3	5	・	・	・	・	・	I～II
36	3	6	3	・	・	・	・	I～III	130	3	5	1	・	・	・	・	I～II
39	・	・	・	・	・	・	・	V	141	・	・	・	・	・	2	・	VI
44	・	・	・	・	2	・	・	V	178	1	2	・	・	・	・	・	II
46	1	4	・	・	・	・	・	II	179	・	・	・	3	・	・	・	IV
49B	・	・	・	2	1	・	・	IV	182	1	・	・	・	・	・	・	I
53	1	2	・	・	・	・	・	II	183	・	・	・	1	1	・	・	V
58A	・	2	2	1	・	・	・	II～III	184	・	2	・	・	・	・	・	II
62	・	・	・	・	・	・	・	V	185	1	1	・	・	・	・	・	II
66	3	・	・	・	・	・	・	I	187	・	・	・	2	・	・	・	IV
68	・	・	1	・	4	1	・	V	190A	・	・	・	1	2	・	・	V
70	・	・	・	・	3	・	・	V	190B	3	4	・	・	・	・	・	I～II
72A	・	・	・	・	・	・	・	II	192	・	・	1	・	・	・	・	III
72B	・	2	・	・	2	・	・	V	193	・	4	・	・	・	・	・	II
73	・	1	・	・	・	・	・	II	194	・	1	・	・	・	・	・	II
76	・	・	・	6	4	・	・	IV～V	195	・	2	・	・	6	・	・	V
77	・	・	2	1	・	・	・	III	198	1	5	・	・	・	・	・	II
79	・	・	・	4	・	・	・	IV	203	・	・	・	・	・	・	・	II
80	・	・	・	4	・	・	・	IV	9(3次)	・	・	・	・	・	・	・	II
81	・	・	・	・	1	3	・	VI	10 "	・	1	・	・	・	・	・	II
82	・	3	1	・	・	・	・	II	11 "	5	3	・	・	・	・	・	I～II
88	・	・	・	5	1	・	・	IV	16 "	・	・	・	・	・	・	・	I
91A	・	・	・	2	・	・	・	IV	17 "	・	・	・	・	・	・	・	I
103	・	・	4	3	3	・	・	III～V	32 "	・	3	・	・	・	・	・	II



第1図 有吉遺跡の後期古墳時代遺構

い住居跡

これらの諸類型中①～③は単一時期に帰属する住居跡とみなした。①はなんら問題はない。②は連続する2時期を個体数の比率から主体期、客体期と呼分け、帰属時期は前者に求めた。③は近隣の他時期住居跡からの混入品を含んでいると考えられる。④、⑤はその存続期間が各々2時期、3時期にわたった住居跡で、例数は少ないが集落構成論の展開上無視できない意義を持っている。複数期にわたって存続したと言ってもその全期間を通して活用されていたとは限らず、先行期の終末近く築造され、後続期の前半には廃絶されていた場合も当然起こり得たと思われる。しかしそのことを確認する手段は今のところは見当らない。

さて住居跡の帰属時期を明らかにした後、同時期のものだけを抽出すると、数基単位で集合し住居跡群を形成するものや、群を形成せずに単独で孤立する住居跡が浮かび上がってくる。さらにこれから出土した杯形土器の検討を通して最終的な群編成を行った。したがって再構成された住居跡群や単独住居跡は、杯形土師器、あるいはおそらく土師器一般の生産単位集団と深く関わっているはずである。また再構成された住居跡群や単独住居跡のネーミングはI-a・II-b……というように、初めにローマ数字で帰属時期を、その後小文字アルファベットで占拠する地点を表わした。注意を要するのは、アルファベットで表示されるものはあくまで台地上の特定地点の指標であり、そこに占拠した集団の系統性とは無関係であることである。例えばIII-cとIV-cとは占拠地点が等しいけれども、両者間の系統性の有無は関連住居跡の存続期間や出土土器の様相等を具体的に検討しなければ明らかにすることができず、系統の異なる集団が入替って占拠する場合も起こり得るのである。

(4) 住居跡群の土器様相

このようにして確定された住居跡群または単独住居跡からは多くの杯形土器が検出されるが、その大半は土師器によって占められている。これらの土師器は基本的には前述のように分類し得るが、規格化された大量生産品ではないので、いずれの類型においてもある程度の形態変異が明瞭に認められる。なかでもA・C型はその傾向が顕著で、同時期・同類型に属しながら器形の全く異なる個体が併存することはごく普通の現象であり、さらなる細分類が可能である。その具体相については次章で詳述するが、そのような細分類による小類型が住居跡群や単独住居跡の土器様相を把握する際の最小単位となっている。

比較的多数の杯形土器を出土する住居跡群では特定の小類型が多数を占め、それ以外の1、2種類の小類型が混在しているという状況が一般的な土器様相である。住居跡群の個性は前者によって表出されることになるが、ある住居跡群で多数を占めていた特定の小類型が他の住居跡群においても多数派を構成しているという現象がしばしば認められる。このように主体的に出土する小類型を等しくする諸住居群間には特定の近親関係が成立していたと考えられ、それ

によって集落内部において住居群を上まわる規模の社会集団を抽出することが可能となる。また主体的に出土する小類型に伴出する少数の客体的小類型については、それが何故混在しているかを問わなければならないであろう。多くの場合それは集落内の他の住居跡群から主体的に検出されており、その住居跡群からの搬入品であると推定される。また集落内部でそのような住居跡群が存在しない場合でも、周辺の同時期集落跡にまで視野を広げれば検出できることも少なくない。要するに住居跡群から主体的に検出される小類型は移動しない土器であり、客体的に検出される小類型は移動した土器として把握することができよう。

3. 分 析

(1) 第Ⅰ期（第2図）

最古期の須恵器は杯蓋では8号跡のNo.6（以下8-6のように略記する。）杯身では190B-10、154-5等である。杯蓋は天井部は低く平坦で、口縁部はハの字状に外方に開く。杯身は体部が袋状に膨らんで、立ち上がり部は外反ぎみに内傾する。これらの特徴は陶邑ではⅠ型式第2段階に編年されている。本期の実年代は須恵器の編年成果から460～70年代を中心にするものと考えられる。

住居跡、住居跡群は8群で構成される。カマドは住居跡東壁に付設されることが圧倒的に多いが、5号跡、11（3次）号跡には存在しない。なおⅠ-a、Ⅰ-bの北側には未調査区域が接しており群構成の全貌が判明せず、Ⅰ-hの16（3次）号跡、17（3次）号跡は2基の古墳によって破壊されている。

各群の土器様相は〈A型〉タイプが5例で圧倒的に多く、他に〈須恵器+A型〉タイプ2例、〈A型+B型〉タイプ1例となる（客体期の個体は除外する）（第2表）。

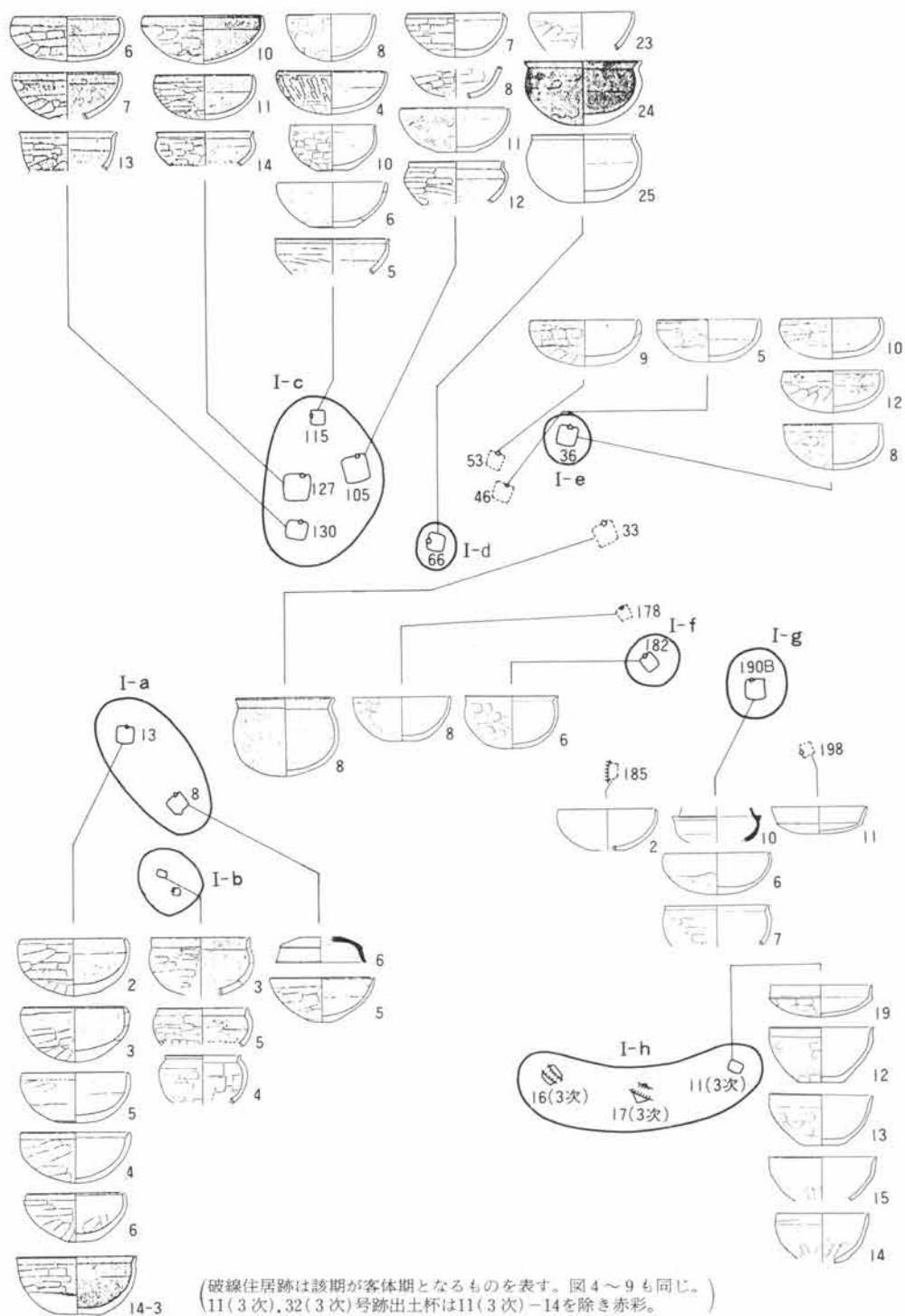
杯形土器はA型が大半を占め、その他は須恵器2、B型土師器1があるに過ぎないのでまずA型の検討から始めよう。すべての群からA型が出土しているが、その形態分類を通して次のような住居跡群の範疇化が可能となる。

Ⅰ- α ……無頸・丸底タイプを主体的に出土する群（Ⅰ-a・c・e・g）

Ⅰ- β ……有頸・丸底タイプを主体的に出土する群（Ⅰ-b・d・f）

Ⅰ- γ ……外反ぎみに薄くなる口唇部・平底タイプを主体的に出土する群（Ⅰ-h）

なおⅠ- α には、この他にⅠ-aの8-5、13-6、Ⅰ-cの115-6等他類には見られない口縁部が内湾する平底の器形も認められる。Ⅰ-gの特徴はⅡ- α とⅠ- β との混合形とも言うべきで判然としないが、Ⅰ-a同様に須恵器を持っていること、また客体期ではあるが次期に190B号跡とともにⅡ-gを構成する198号跡の11がⅠ-aの8-6と同形であり、その模倣品



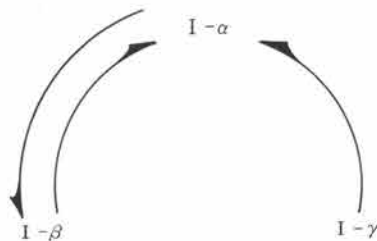
第2図 第1期の杯と住居跡

第2表 住居跡群の土器様相(第I期)

	須恵器	A 型	B 型
I-a	○	○	
I-b		○	
I-c		○	
I-d		○	
I-e		○	
I-f		○	
I-g	○	○	○
I-h		○	○

と考えられること等から、本来はI- α に属するものと考えられる。

これらの諸範疇は相互に孤立して存在したのではなく、その間になんらかの交流の行われたことが土器様相を通して知ることができる。すなわち自己の範疇に特有な器形に混じって、他範疇に特有な器形が認められるのである。たとえばI- α 中にはI-cの105-12、115-5、127-14、I-eの36-8、I-gの190B-7等のように本来I- β に出自する器形や、I-aの14-3（本来は13号跡からの出土品である）、I-cの115-10、130-13等のように本来I- γ に出自する器形がある。同様にI- β 中にもI-dの66-23のようにI- α に出自する器形が見られる。一方I- γ は自己の範疇に特有な器形ばかりで構成されている。これを要約すれば第3図のようになり、I- α ・I- β 間では土器が相互に移動し、I- α ・I- γ 間では土器の移動はI- γ からI- α への一方通行であり、I- β ・I- γ 間には土器の移動がなかったことが知られる（第3図）。



第3図 範疇間の土器移動(第I期)

A型土師器の製作についてはI- α は無頸丸底タイプを各々専門に製作しており、混在する他範疇の土器はそこからの搬入品と考えられる。範疇間の土器の移動の意味については次の「第

II期」の項で考えるので、ここではA型土師器の製作について考察しよう。I- γ が単一住居跡群（厳密に言えば土器を出土しているのは1基の住居跡に限定されるが）で構成されていることを思えば、各範疇に含まれるすべての住居跡群が自己の範疇に特有な類型のA型土師器を製作していたのであって、範疇内の特定の住居跡群が独占的に製作し、それらを範疇内に一元的に搬出していたのではないことが考えられる。このことはI- α 、I- β 等のように複数の住居跡群を擁する範疇のA型土師器が特定の住居跡群に集中的に分布する傾向が認められないことから裏づけられよう。もっともI-b・d・e・f等は住居跡群を形成しない単独住居跡であるが、それからもA型土師器が検出されている。このことからすべての住居跡が自己の範疇に特有な類型のA型土師器を製作していたと想定することもできるかも知れないし、あるいはすべての住居跡ではなく、住居跡群を形成しない単独住居跡にのみ適用できることも知れない。小論では後者を採用し、A型土師器ばかりでなく後出する他類型の杯形土師器についても、一般的に土師器製作拠点として住居跡群と同様の資格を与えている。前者を確認するためには出土資料の胎土や調整法等についての従来以上に詳細な情報とその整理が必要であり、今後の課題とする他はない。

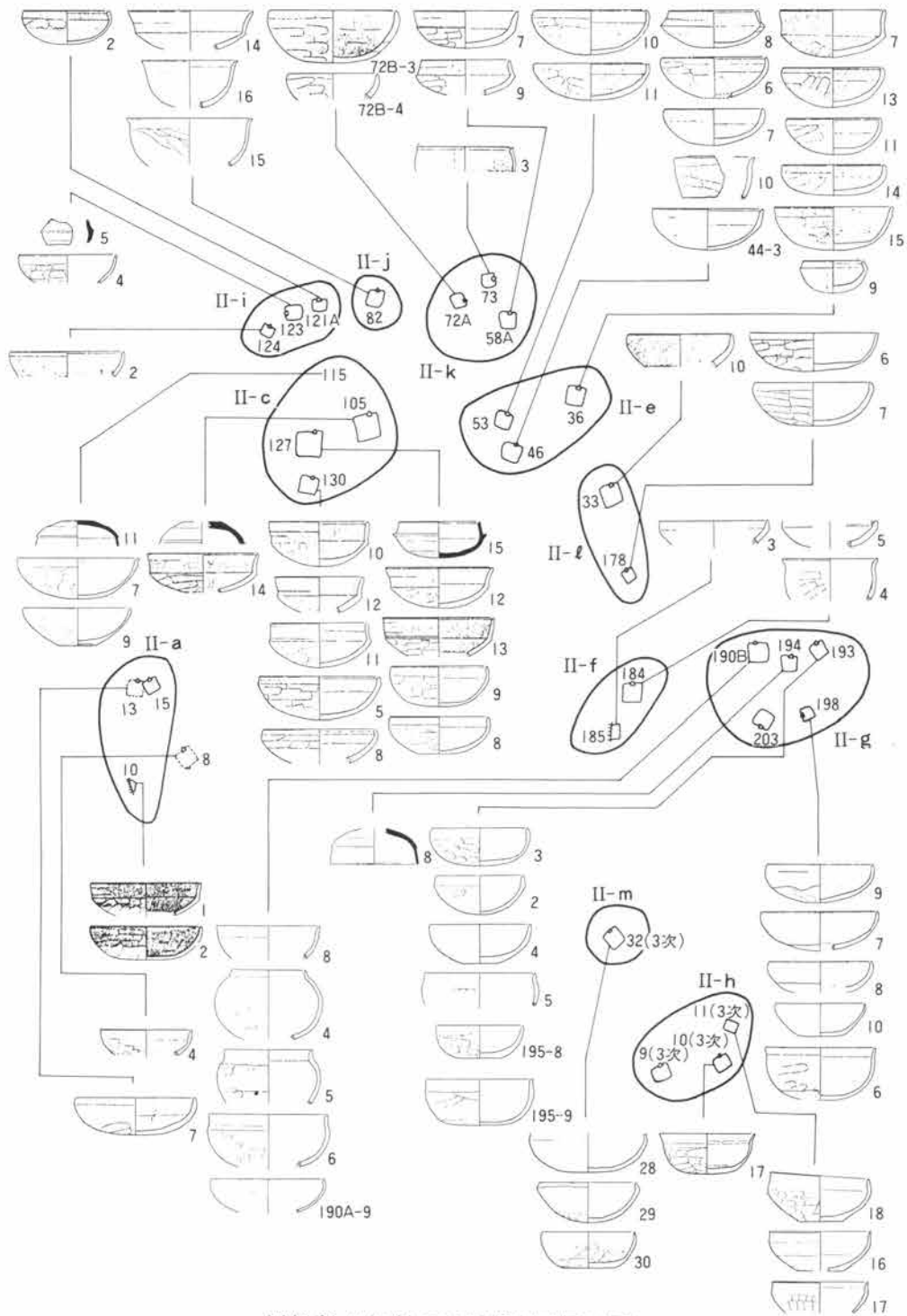
このように製作拠点が個別住居跡群ないし単独住居跡に分散しているにもかかわらず範疇としてまとめることができるように、それらはしばしば複数群に共通する典型的なA型土師器を製作していた。この範疇はいかなる人間集団に相当し、その内部の土器製作のシステムはどのようなものであったろうか。1基の住居跡には基本的には1組の夫婦とその未婚の子供達が居住していると考えられる。その変形として配偶者に先立たれた老親や兄弟姉妹等の自存不能者が同居していた場合も少なくなかったであろう。その住居跡が数基集合した住居群には近親的親族紐帯で結ばれた人々——奈良時代の籍帳から推量すれば、既婚男子の兄弟結合を中心としてしばしば従父兄弟までも包摂する同世代父系親族と、かれらの親・妻・子供達を含み込んだ親族共同体が集住していたと考えられる。A型土師器は通常の場合この第1次的な親族共同体の内部で製作され、使用され、廃棄されていたので、杯形土器にせよ甕形土器にせよそこから出土する土師器群が器種毎におしなべて典型的であるのは当然と言える。しかしながらA型土師器の類型性はこの住居跡群の枠を乗り越えて、近隣の複数の住居跡群にまで広がっている。このことは各住居跡群に少なくとも1人以上は存在していたであろう土師器製作者間に密接な情報伝達網が前提的に存在し、それを通して自己の範疇に特有な土師器の形態のイメージが普及していったものと考えられる。このような情報伝達網が存在し得る場としては、当時の在地社会にあってはやはり親族的連帯の世界しか想定し得ない。この範疇の中に親族紐帯の認められない住居跡群や階層的落差の顕著な住居跡群が粉れ込んでいれば、そこから出土する土器群は周囲の住居跡群とは異なった様相を呈するであろう。この範疇の人間集団としての実態は住

居跡群に集住する親族共同体よりもさらに広範な人々を親族紐帯で結合していた共同体、さらに具体的に表現すれば親族関係の外縁が従父兄弟にとどまらず、再従父兄弟（父親が従父兄弟関係）をも包摂していた第2次的な親族共同体であったと推定される（もっとも「第2次的」と表記するのはあくまで分析上の順序に従ったままで、発生論的にはこの方が「第1次的」な共同体であったのかも知れない）。

次にA型土師器以外の杯形土師器の検討に移ろう。須恵器の分布はI-a・gのみである。これらの須恵器は有吉遺跡への移住以前に母集団の有力住居跡群から別個に分与されたものであろう。範疇としてはI- α だけに限定されていて、他範疇はまだ須恵器を入手してはいなかった。B型土師器の分布は客体期の198-11を含めるとI-g・hであり、範疇としてはI- α ・ γ に認められる。I-gの198-11はI-aの8-6またはその同形須恵器を模して作られたものであり、I- α の中でもI-aとI-gとの関係の深さをうかがえる。なおこのB型土師器は第II期の状況を参考にすると、有吉遺跡内で製作されたものとは考え難く、8-6の須恵器とともに外部から搬入されたものと思われる。この2群は本期間中に分枝して2群となったと思われるが、本末関係は不明である。またI-hの11（3次）-19については、そのモデルとなった形態の須恵器がI-hはおろか有吉遺跡からは検出されていないので、それ自体外部で製作された搬入品であった可能性が高い。これに類似するものに村田川南岸の大厩遺跡K4-7・8があげられる。I-hはI- γ に属する唯一の住居跡群であり、A型土師器の様相についても特異な存在である。したがってB型土師器の11（3次）-19のみ他処から搬入されたとするよりもI-hの住民が本期中にI- α やI- β とは異なる故地から有吉遺跡に移住してきたと考える方が自然な解釈であろう。I-hの住民の故地はB型土師器の特徴からして大厩遺跡またはそれと共通する土師器を製作していたその周辺の未調査遺跡に求められるであろう。なおI- α とI- β が共通の母集団から派生したものか、あるいは別個の母集団から派生したものか、さらにそれらの故地は何処にあったか等の諸問題は判然としない。

(2) 第II期（第4図）

須恵器は蓋が4点、身が1点検出されている。出土点数のこのような偏りはそれらが廃棄された状況にも関係するが、搬入当時すべてが蓋身揃いで集落に持込まれたわけではないことをも暗示する。蓋は天井部は丸く高く、口縁部はやや開き気味に直降する。天井部と口縁部とを画する稜は相変わらず鋭い。身は前期に見られた体部の膨らみは消えるが依然として深く、蓋受け部は急角度で上向し、立上がり部はやや内傾し長い。これらの特徴は陶邑ではI型式第4・5段階に相当する。なお105-14は天井部下端が稜から沈線へと変化した個体であるが、本遺跡における例数の少なさ、及び天井部の高さや口径等の近似性から本期資料として扱った。本期



(10(3次), 11(3次), 32(3次)号跡出土杯は赤彩)

第4図 第II期の杯と住居跡

は将来周辺地域の調査例の増加に伴い、さらに細分される可能性を持つ。実年代は480～90年代を中心としているが、その終末は6世紀初頭に及ぶであろう。

本期の住居跡群は単独住居跡も含めて11群で構成される。カマドは住居跡東壁に付設されるものが多い。なおII-a、II-bはいずれもその北側が未調査区域に接しており全貌が判明しない。

各群の土器様相は〈須恵器+A型+B型+C型〉タイプ1例、〈須恵器+A型〉タイプ2例、〈A型+B型+C型〉タイプ1例、〈A型+B型〉タイプ2例、〈A型+C型〉タイプ1例、〈A型〉タイプ4例となっている。前期に比べ〈A型〉タイプの比率が著しく小さくなっているが、A型土師器はすべての群から検出されている(第3表)。

第3表 住居跡群の土器様相(第II期)

	須恵器	A 型	B 型	C 型
II-a		○	○	
II-c	○	○	○	○
II-e		○	○	○
II-f		○		
II-g	○	○		
II-h		○		
II-i	○	○		
II-j		○		○
II-k		○	○	
II-l		○		
II-m		○		

本期からC型土師器が登場する。II-cの127-12、II-jの82-14、さらにII-eの36-7等である。前2者はII-cの105-10のB型土師器を祖型として、口縁部の外反度を誇張した器形で、椎名崎遺跡の133-6・8等の類例が認められる。II-eの36-7は口縁部が長大化した器形で、有吉遺跡及び周辺諸遺跡でその祖型を求めることは困難である。

前期同様A型土師器の形態分類を通して次のような住居跡群の範疇化を行った。

II- α ……無頸・丸底タイプを主体的に出土する群 (II-a・c・e・f・g・k・l・m)

II- β ……有頸・丸底タイプを主体的に出土する群 (II-j)

II- γ ……無頸・平底タイプを主体的に出土する群 (II-h)

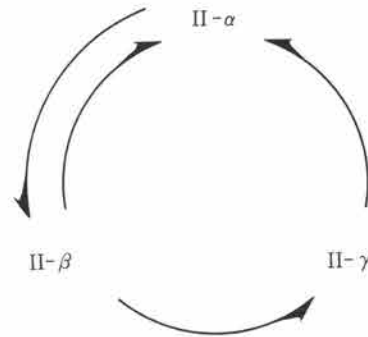
土器の形態上はⅠ- α →Ⅱ α 、Ⅰ- β →Ⅱ- β 、Ⅰ- γ →Ⅱ- γ という系統関係を持つと考えられる。Ⅱ- α はⅠ- α に比べ器高が低くなり、口径がやや大型化する傾向がある。Ⅱ- β はⅠ- β に比べ頸部のくびれが弱くなり、内面の稜は消失するかかすかなものとなる。Ⅱ- γ はⅠ- γ に比べ器高が低くなり、体部中程で屈曲する器形になる。この他に局地的なA型土師器の小類型として、Ⅱ-gに特有な190B-6や195-9に見られる口縁付近に強い横ナデを施す器形、及びⅡ-gの195-8やⅡ-mの32-30のように、平底からあまり屈曲することなく口縁に到る小ぶりの器形等がある。

住居跡群範疇に認められる本期の特徴は、第1にⅡ- α がⅠ- α よりも大幅に増加したことである。新たに形成されたⅡ-f・i・k・l・mはⅠ- α の派生集団か、もしくはⅠ- α の有吉遺跡定住以前の母集団からの転入者であろう。このうちⅡ-fの占拠地は第Ⅰ期にⅠ-Bに属するⅠ-fが占拠していたもので、未調査区域に接してはいるものの占拠集団の交替があった可能性が高い。第2にⅡ- β がⅠ- β よりも減少していることである。Ⅱ- β に属するのはⅡ-jのみで、しかも単独住居跡となっている。さらに特異なのはその占拠地点で、あたかもⅡ- α に属するⅡ-c・e・i・kに囲繞されるかのように立地している。この現象は次のように解釈されよう。前期末にⅠ- β はなんらかの理由でこの台地上における生存基盤を失い、その後裔であるⅡ- β 、すなわちⅡ-jはもはや自存不能となり、本期において構成要素が増大し台地上の主要勢力となったⅡ- α の保護下に入ったのではあるまいか。

さて本期においても範疇間の土器の移動が認められる。すなわちⅡ- α 中にはⅡ-eの36-10、Ⅱ-fの184-4、Ⅱ-gの198-6等のようにⅡ- β 出自の器形や、Ⅱ-cの115-9、127-8、Ⅱ-gの193-4、198-10等のように口縁部形態が若干異なるものの、おそらくⅡ-hに出自すると思われる器形がある。またⅡ- β ではⅡ-jの82-14のc型土師器はⅡ- α からの搬入品であろう。さらにⅡ- γ 中にもⅡ- β に出自する10(3次)-17が存在する。以上をまとめると第5図のようになる。Ⅱ- α ・Ⅱ- β 間では土器が相互に移動しているが、Ⅱ- α ・Ⅱ- γ 間ではⅡ- γ からⅡ- α の一方通行、Ⅱ- β ・Ⅱ- γ 間でもⅡ- β からⅡ- γ への一方通行となっている(第5図)。

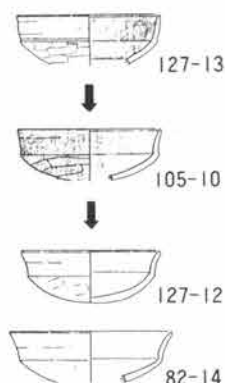
次にA型土師器以外の杯形土器を検討しよう。この作業を通してⅡ- α の内部構造がある程度明らかにされる。まずB型土師器の分布から見ていくと、この類型を出土したのはⅡ- α に限られていることに気がつく。このことはⅡ- α にのみ須恵器が見られ、他の範疇からは検出されないことと対応している。つまりB型土師器が作られる前提条件は、目の前に須恵器が存在し、必要なときは自由に手に触れてその質感や端部の処理法等を確認できることであるが、その条件を満たす範疇は須恵器を所有するⅡ- α において他にないのである。このようにB型土師器がⅡ- α 中で製作された土器類型であると考えれば、今度はⅡ- α 中においてもB型土師器を

出土する群II-a-1 (II-a・c・e・k) と出土しない群II-α-2 (II-f・g・i・l・m) とが併存していたことがわかる。II-α-2ではII-g・iから須恵器が検出されているにもかかわらずB型土師器が全く見出せないのは、II-α-2ではB型土師器を製作していなかったことを意味する。一方B型土師器を製作していたと見做されるII-α-1のうち、さきのB型土師器を製作する前提条件、つまり須恵器を所有していたのはII-cのみでII-α-1諸群は、この条件に恵まれていなかったことが判明する。すなわちII-α-1中でもB型土師器を製作していたのはII-cのみに限定されていたのである。



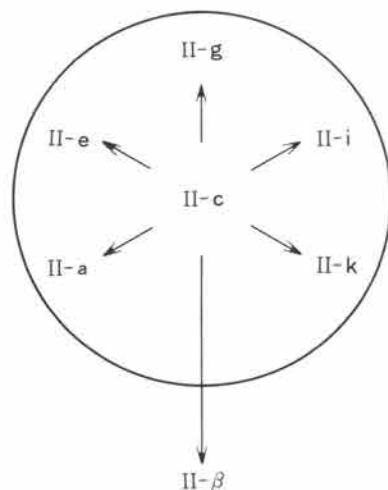
第5図 範疇間の土器移動(第Ⅱ期)

さらにC型土師器についても同様に考えることができよう。C型土師器は須恵器の忠実な模倣からは決して生まれてこない。B型土師器の製作には須恵器の存在が前提となるように、C型土師器の製作には祖型としてのある種の土師器の存在が前提となる。本期のC型土師器はいずれもその祖型を同時期のB型土師器に求められる。とくに127-12、82-14については第6図のように系統的な変遷をたどることができる。この図からも知られるように、この類型のC型土師器はII-c内において生成したことが明らかである。それにたいして同類型土師器が検出されている椎名崎遺跡では、このような系統の変遷をたどることができない。このことは有吉遺跡における本類型の変遷過程でII-cそのもの、あるいはそれと親近関係にある小集団がII-cで作られた本類型土師器を伴って椎名崎遺跡に移住したことを意味するであろう。椎名崎遺跡の本格的な集落形成は本期から開始されるので、有吉遺跡からのこのような移民は椎名崎遺跡の開拓者としての役割を果たしていたことが想像される。ただ36-7については有吉遺跡では系統の変遷をたどることができず、周辺他遺跡で製作された搬入品と考えられる。したがって36-7を除いたB型・C型土師器はいずれもII-cで製作されていたことが判明する。このことは同時にII-c以外の住居跡群から検出されたB型・C型土師器は、36-7を除いてII-cから搬出されたことを意味している。すなわちII-α内部の土器の移動に着目すれば、B型・C型土師器についてはII-cから一元的に範疇内に搬出されていたことになる。



第6図 C型土師器の生成過程(1)
—有吉—
のである(第7図)。

このことは須恵器についてもあてはまらないだろうか。須恵器の分布はII- α に限定され、II-cから3個体、II-g・iから各1個体検出されている。出土数ではII-cが他を圧倒しているが、それはII-cが外部から須恵器を一括搬入し、II- α 内部にB型・C型土師器同様に再分配していたことによるものであろう。各住居跡群が独自に須恵器を導入していたとすれば、II-cが出土比率の上で優位に立つ必然性は失われるはずである。かくしてII- α 内部ではB型・C型土師器、須恵器については36-7のC型土師器を除きII-cから一元的に搬出されていたと考えられる



第7図 II- α 内部の土器の移動

ここでII-cのII- α 内部における機能について上述の分析を整理してみよう。II-cは本期の有吉遺跡でB型・C型土師器を製作していた唯一の住居跡群であり、またそれらをII-cが属するII- α の諸群に一元的に供給していた。さらに須恵器についてもII-cはII- α を代表して外部から一括して導入し、それらをB型・C型土師器同様にII- α の諸群に独占的に供給していた。すなわちII- α に関する土器の移動の主要部分については常にII-cが介在し、流通の中心に位置しているのである。この状態を維持するためには、言うまでもなくII- α に属するII-c以外の諸群が独自に外部から須恵器を搬入したり、その須恵器をモデルとして独自にB型・C型土師器を製作したりすることがないようにII-cがII- α の諸群を〈統制〉しなければならない。それはII- α 全体にとってすぐれて政治的な問題であり、II-cがII- α の政治的な

意味での〈首長〉の地位にあるときに初めて実現可能となる。ただし、この〈首長〉権は分析の結果ではあくまでII- α 内部にとどまっており、同一台地上に併存したII- β ・II- γ には明瞭には及んでいない。その点で地縁紐帯に依拠する中世村落の首長権とは性質を異にしており、II- α の〈首長〉権はあくまでII- α という第2次的な親族共同体の枠内にとどまるのである。親族共同体の首長制の徴証が須恵器やB型・C型土師器を範疇内部に一元的に搬出することによって計られるとすれば、第I期には首長制は不在である。移住して間もない第I期の住居跡群・単独住居跡はまだ政治的独立性の高い集落構造を形成するまでに到らず、各範疇は母集団との紐帯を強く残したままであった。須恵器やB型土師器を所有していたI-a・g・hの土器様相はA型土師器の比率が圧倒的に大きいという点で、おしなべて第II期の首長格のII-cを取り巻くII- α 諸群と共通している。このことはとりもなおさずII-cに相当する第I期の首長的住居跡群が有吉遺跡の外部にあって、そこから有吉の諸群を遠隔操作していたことに他ならない。このような意味において第I期の有吉遺跡の集落構造は、社会的には開かれたものであり、政治的には未完成なものと規定できる。

首長制に関連する重要な問題として前節で論じた土器製作に関わる範疇内部の情報伝達網についてさらに考えてみたい。この情報伝達網を掌握していたのは誰であったのか。すなわち首長群から諸他の構成群への命令や規制に近いニュアンスを伴って一方的に情報が下達されていたのか、それとも構成群が比較的平等の立場で情報交換を行っていたのだろうか。 α 系を例にあげて考えてみると、B型・C型土師器については前者が、またA型土師器については後者がふさわしいように思われる。しかし結論から先に述べれば、いずれの土器類型も前者に帰着するのである。B型・C型土師器の場合は既述のとおりで問題はない。A型土師器については首長群と諸他の構成群とを問わずに出土しているので、一見範疇の共同体的側面、とくに構成員の平等性を表明しているように思われる。だがA型土師器の普及過程を想定すれば、それが皮相的な理解に過ぎないことが明らかになろう。B型・C型土師器は第II期の段階ではその所有群が限定されているが、第III期以降はA型土師器にとって替わり最も普遍的な杯型土師器の類型になる。第III期以降のB型・C型土師器は量的な普遍性においてあたかも第I期のA型土師器に等しい存在である。とすればA型土師器についても第I期以前においては、あたかも第II期のB型・C型土師器のように限定的所有と製作制限の対象となっていた段階を経過しているはずであろう。したがって少なくとも範疇に共通する類型の選定もしくは創造については首長群の政治的裁量の分野に属している。そしてそれらの統制が解除された場合にのみ諸類型土師器はあまねく範疇内に普及するのである。以上のことから範疇内部で新類型が選定または創造され、その所有や製作が秩序づけられ、さらにそれらの統制が解除され範疇内部での全面的普及の契機を与えられる過程はすべて首長群から諸他の構成群への一方的な情報伝達に終始してい

ることが理解できるよう。ただし統制解除後に範疇内部が解除された類型のみに統一されてしまう事態にまで首長群の政治力が発揮されたか否かは不明である。おそらくそこに範疇が潜在的に蔵している共同体的平等性が介入する余地が残されていると考えられる。

範疇内部における土器の移動とその意味するところを以上のように確認した上で、今度は第Ⅰ・Ⅱ期に認められた範疇間の土器の移動について考えてみよう。範疇間の土器の移動については、まず第Ⅰに搬出入の一元性が認められず、範疇内部の土器の移動とは性格を異にしていたことが知られ、第Ⅱに第Ⅱ期に β 系から γ 系への移動が付加される他は、奇しくも α 系を中心とする β 系、 γ 系との関係は一貫して変化してはいない。諸範疇が親族共同体であるとすれば、範疇内部の土器の移動は親族同士の交流を表現し、範疇間の土器の移動は親族外の交流を意味している。土器の移動を伴うような親族外交流は土器よりもその内容物が主体となる贈与であるか、または婚約者が嫁出す際生家で使用していた自己の食器を配偶者宅へ持参する可能性のある結婚であるかのいずれかであろう。いずれの場合も親族共同体の連合関係を表出しているが、前者の場合杯形土器は個人的に識別される食器としての性格が強く、贈与対象物の容器としてはむしろ小形壺形土器がふさわしい。範疇間の土器の移動は、だから、贈与の結果とするよりも結婚に伴う配偶者の移住の徴証と把握すべきであろう。

このように考えると範疇間の土器の移動で α 系の β 系、 γ 系との関係が第Ⅰ・Ⅱ期を通して変化しなかったことはあらためて問題にする必要であろう。 α 系と β 系との関係は土器が相互に移動しており、配偶者を互恵的に交換していたことを示している。それにたいして α 系と γ 系との関係は土器が γ 系から α 系へ一方的に移動しており、配偶者が常に前者から後者へ提供されていたことが知られる。このような相違は各親族共同体の階層差がある程度反映するものであろう。重要な点はこれらの関係が第Ⅰ・Ⅱ期を通して維持されたことであり、そこに社会的に承認された体制としての婚姻制度の一端をうかがうことができる。とすれば第Ⅰ期の有吉遺跡の集落構成は相互に配偶者を提供し合う互恵的な α 系と β 系との姻族連合体が本体であったが、第Ⅱ期に入ると β 系は衰退し台地上最後の β 系であるⅡ-jは自存不能に陥って、伝統的姻戚関係を通して α 系諸群の〈保護〉下に入るに到った、一方 γ 系は第Ⅰ・Ⅱ期を通して主として α 系との姻戚関係から台地上の突端部に寄生的に占拠していたと考えることができる。Ⅱ-jのこのような状態は、古代籍帳に現われる「寄口」に相当するものであろう。また非 α 系がいずれも α 系と姻戚関係を結んでいたことは、遅くとも第Ⅱ期には α 系が台地上の居住権を掌握し、姻戚関係を持たない非 α 系の台地上での居住を拒絶していたことをも意味していたのではなかろうか。

最後に本期の住居跡群・単独住居跡の前期以来の出自について確認しておこう。Ⅱ-aはⅠ-aと占地を同じくしており、所属範疇もⅠ-a→Ⅱ-aで同一系統下にある。そこでⅠ-aとⅡ-aは系統関係にあり、Ⅱ-aはⅠ-aの後裔と考えられる。このことはたんに範疇上の次

元にとどまらず、それらの住居跡群で生活していた人間関係にもあてはまるであろう。I-a は第I期において須恵器を有する数少ない住居跡群のひとつであったが、II-a には須恵器は存在せずII-c との結びつきが強くなっている。この変化は明らかに住居跡群の凋落現象として把握することができる。

II-c はI-c の4基の住居跡がそのまま本期にまで存続した住居跡群でI-c → II-c への系統性は明らかである。第I期では須恵器を持たない一般的な住居跡群であったが、第II期になるとII-αの政治的首長に成長する。

II-e はその中の36号跡が第I期以来存続しており、所属範疇がI-α → II-α であるのでI-e → II-e の系統関係にあることが判る。

II-k は新群でII-α-1 に属していることから、II-a あるいはII-c からの派生群と考えられる。

II-g はその中の190B号跡が第I期以来存続しており、所属範疇がI-α → II-α であるのでI-g → II-g の系統関係にあることが判る。

II-f はI-f の182号跡に隣接して立地しているが、I-f がI-β に属していたのにたいし、II-f はII-α に含まれており、その間に系統関係が確認できないために新群と思われる。その出自はII-f がII-α-2 に属していることから、同じ範疇で前期以来存続するII-g から派生したものと考えられる。

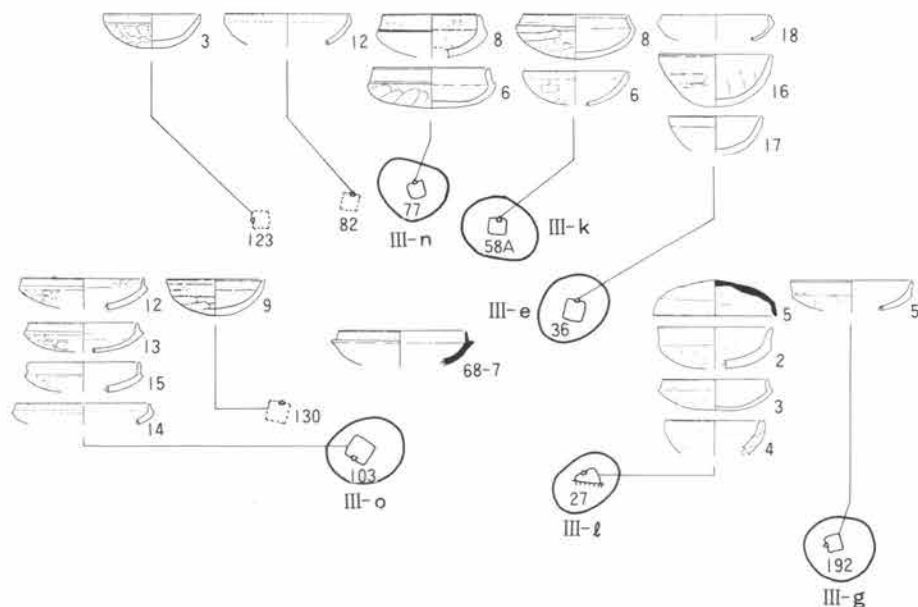
II-i・1・m は新鮮でII-α-2 に属していることから、II-g からの派生群と考えられる。

II-j は新群でII-β に属する唯一の群である。第I期にI-β に属した群の後裔であろう。その立地の特異性は先述したところで、自存不能となって姻戚関係を通してα系の〈保護〉下に入ったと考えられる。

II-h はその中の11(3次)号跡が前期以来存続しており、所属範疇がI-γ → II-γ であるのでI-h → II-h の系統関係にあることが判る。

(3) 第III期(第8図)

須恵器杯蓋は天井部と口縁部との境には稜、沈線とも存在せず、口径の拡大・器高の低下が進行しているが、口唇部には内面に稜が形成され古相を示す。杯身は立上がり部が短くなり、口径や器高が杯蓋に対応して変化している。陶邑ではII型式第3段階に相当する器形である。この直前と思える器形を呈する個体が椎名崎遺跡96-5・6であり、それらをも含めて第III期として取扱った。合子形の杯としては蓋・身ともに最大径となる時期である。実年代は520~30年代を中心に、6世紀中葉まで及ぶものと考えられる。



第8図 第三期の杯と住居跡

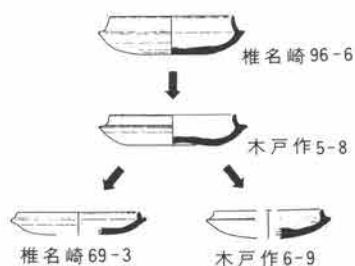
集落構成は6群に細別されるがすべて単独住居跡である。カマドは依然として住居跡東壁に付設されるものが多い。なお27号跡西半は未調査区域に含まれている。

各群の土器様相は〈須恵器+A型+B型〉タイプ1例、〈A型+B型〉タイプ1例、〈A型+C型〉タイプ1例、〈B型+B'型〉タイプ1例、〈B型+B'型+C型〉タイプ1例、〈C型〉タイプ1例となる。本期の特徴は〈A型〉タイプの消滅、B型土師器の普及、さらにB'型土師器の出現等である(第4表)。

第4表 住居跡群の土器様相(第三期)

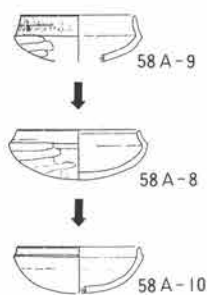
	須恵器	A 型	B 型	B' 型	C 型
III-e		○	○		
III-g					○
III-k		○			○
III-l	○	○	○		
III-n			○	○	
III-o			○	○	○

A型の器形は無頸・丸底タイプのみでII-aの系統をひくものである。II-aに比べると口径が小さくなり、口縁部が開き気味となる。C型はIII-nの77-6、III-oの103-12・14であ

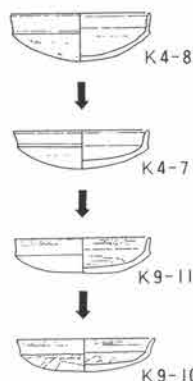


第9図 非有吉系須恵器の型式変遷

る。これらのモデルにふさわしい形状の須恵器は有吉遺跡からは出土していないが、有吉遺跡近傍の椎名崎遺跡や木戸作遺跡からはこれらの須恵形土師器に類似する須恵器が検出されており、時間の経過とともに系統的に変遷しているのである(第9図)。これらの須恵器は陶邑での〈標準的〉な製品の編年観にそぐわないが、それらとの伴出関係から6世紀初頭から後葉にかけて生産されたものと思われる。77-6と103-12・14との形状の相違はこの種の須恵器の系統の変遷に対応しているのである。C型土師器にはIII-kの58A-8、III-gの192-5、III-oの103-15等がある。58A-8については同時代の陶邑の光明池地区の一部で、底部の深い器形が生産されており、またその製品と思われる須恵器が木戸作遺跡の27号跡から検出されているので(27-6・7)、B'型土師器とみなすこともできるかも知れない。しかし58A号跡では古式の身型B型土師器が底部の深さはそのままに、立上がり部だけが短く退化してC型土師器に変容していったことが確認できるので(第10図)、その一過程を示す資料としてC型土師器に位置づけるべきである。III-gの192-5については大厩遺跡においてこのタイプの系統的な型式的変遷を跡づけることができる(第11図)。B型土師器からC型土師器が生成する過程を示す好例である。III-oの103-15については系統性は不詳であるが類例として椎名崎遺跡75-19、同133-10があげられる。

第10図 C型土師器の生成過程(2)
—有吉—

ZUII

第11図 C型土師器の生成過程(3)
—大厩—

本期には各住居跡から様々な種類の土師器が伴出しているのので、主体的な土器様相を見極めることが困難であるが一応次のような範疇化が可能となる。

III-α……基本的な土器組成が〈A型+B型〉と考えられる住居跡(III-e・k・1)

III- δ ……基本的な土器組成が〈B型+B'型〉と考えられる住居跡(III-n・o)

III- ε ……基本的な土器組式が〈C型〉と考えられる住居跡(III-g)

このうちIII- α はそのA型土師器の特徴からみてII- α の後裔となる在来範疇であるが、III- δ ・ ε は外来範疇と考えられる。III- δ はそのB'型土師器の特徴からその故地を椎名崎遺跡あるいは木戸作遺跡に推定できる。しかし木戸作遺跡は本期から開始される集落跡であり、そこから出土した須恵器が椎名崎遺跡と関係が深いとすれば、より古い歴史を持つ椎名崎遺跡から木戸作遺跡の載る台地に移民が行われ、木戸作集落形成の一翼を担ったと考えることができる。とすれば椎名崎遺跡からの移民の波は木戸作遺跡に限られずに有吉遺跡にも及んでいたのではあるまいか。III-oの故地はこのような理由から椎名崎遺跡に求められよう。なおIII-nの資料の方がIII-oのそれよりも型式的に先行するので、まずIII-nが移住し、しばらく後にIII-oが移住してきたのであろう。またIII- ε はそのC型土師器の特徴から大厩遺跡からの移住民と思われる。

集落内における土器の移動は各住居跡の主体的な土器様相が定まらないので不明部分が多いが、全体として土器の移動は低調であったようである。少なくともIII- ε については他の範疇との交流は行わなかったであろう。

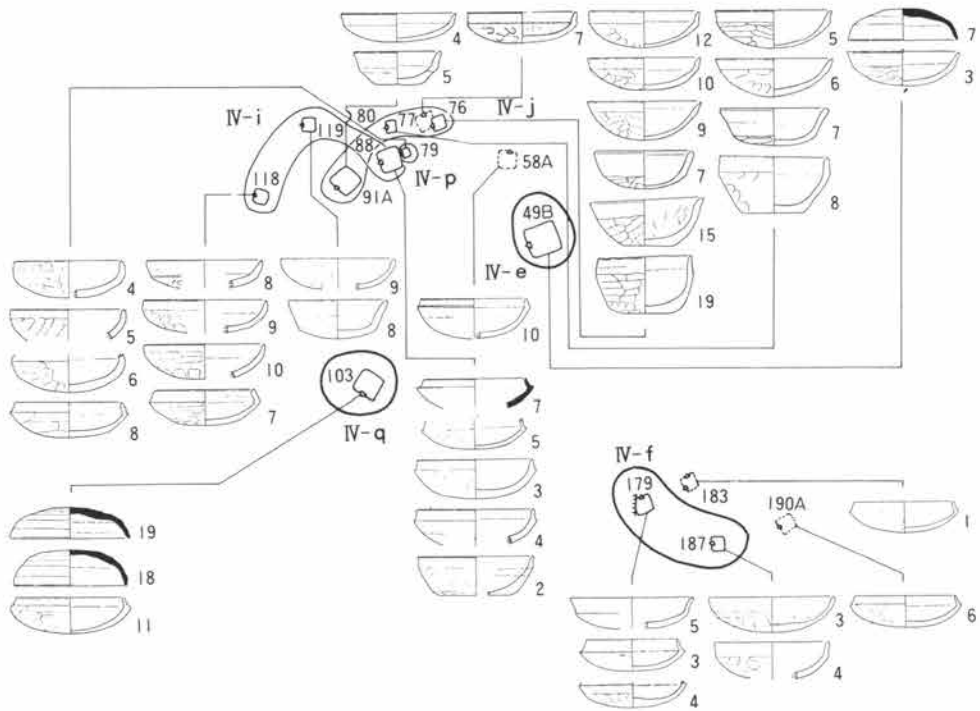
諸範疇の動向に関する本期の特徴は第1に前代に支配的存在であった α 系の住居跡総数が著しく減少したこと、第2に β 系・ γ 系が完全に消滅したこと、第3にそれらに替って椎名崎遺跡起源のIII- δ 、大厩遺跡起源のIII- ε が新たに移住してきたこと等があげられる。 α 系の政治的な弱体化に伴い β ・ γ 系が消失したのは、かれらが婚姻関係を通して α 系との連合体を形成していたためであり、その連合紐帯が本期の動向を通して政治的運命共同体と呼び得るほど強靱であったことが知られよう。またIII- δ ・ ε が新たに台地上に占拠した。III- ε はIII- α と婚姻関係を結んでいないにもかかわらず、 α 系が伝統的に政治的影響力を行使してきた台地上に占拠している。これはIII- α がIII- ε の台地上における占拠権および居住権を承認せざるを得なかったためであると考えられるが、このような勢力関係は単独住居跡でしかないIII- ε を孤立的存在として把握した場合説明がつかず、III- ε の背後に大厩遺跡に基盤を置くIII- ε の首長的住居跡群の存在を想定せざるを得ないのである。要するにIII- α をめぐるIII- δ ・ ε との諸関係はIII- α の台地上における政治的影響力の著しい衰退化を反映するものであろう。

最後に本期住居跡の前期以来の出自を確認しておきたい。III-e・k・lはIII- α に属し、いずれもII- α の後裔である。このうちIII-e・kは前期の継続住居跡で各々II-e→III-e、II-k→III-kの系統関係が知られる。III-lもII-lの占拠区域内に立地することからII-l→III-lの系総関係を想定できよう。この3基の住居跡は各々が前期には異なる住居群に属していたので、本期における住居跡間の紐帯は従父兄弟関係あるいは再従父兄弟関係であると想

定され、小論で通常取扱う「住居跡群」の紐帯が兄弟関係を主としていたのに比べ、その連帯性が明らかに弱くなっている。このことはIII- α が親族共同体としては正常な状態ではなく、崩壊過程が深く進行した末期的症状であったことを意味している。このような状況を考慮すれば、III- α には顕著な首長制の存在を想定することがむづかしい。

III-g・n・oは外来的範疇で、III-n・oは椎名崎遺跡からの、またIII-gは大厩遺跡からの移住集団であると考えられる。

(4) 第IV期 (第12図)



第12図 第IV期の杯と住居跡

須恵器杯蓋は天井部と口縁部の境で依然として直線的に屈曲するが、口縁部の開きが大きくなり、口唇部は丸味を帯びて内面の稜は消失する。杯身の底部はさらに浅くなり、蓋受け部は成形的には体部の延長に過ぎず、もはや水平方向に引き出されることはない。立上がり部の内傾化は本期以降顕著な傾向となる。以上の諸特徴は陶色ではII型式第4段階に相当する。実年代は560~70年代を中心とした時期が考えられる。

集落構成は6群の住居跡群・単独住居跡からなる。カマドは殆どが住居跡北壁に付設されるようになる。IV-fの北側には未調査区域が存在する。台地東部にはIV-i・j・pが密集し

〔研究ノート〕

ている。IV-i は出土器の型式的特徴から見てIV-j よりも後発の様相を呈する。またIV-p はIV-i に圍繞された立地を示している。

各群の土器様相は〈須恵器+B型+C型+D型〉1例、〈須恵器+B型〉2例、〈B型+C型+D型〉1例、〈B型+C型〉2例となっている（第5表）。A型土師器が完全に消失したこと、B型土師器がすべての群から検出されるようになること、D型土師器の存在等が本期の顕著な特徴である。

第5表 住居跡群の土器様相(第IV期)

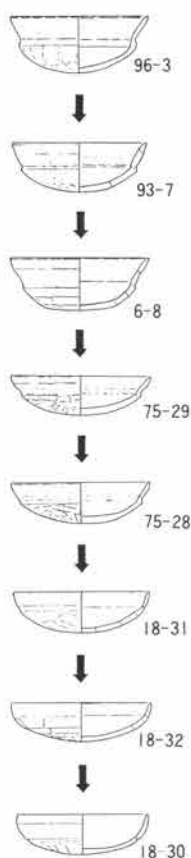
	須恵器	B 型	C 型	D 型
IV-e	○	○		
IV-f		○	○	
IV-i		○	○	
IV-j		○	○	○
IV-o	○	○		
IV-p	○	○	○	○

C型土師器にはIV-fの179-5、187-3、IV-iの118-8、119-8、IV-jの76-7・10、80-7、91A-4、IV-pの88-3・4があり、D型土師器はIV-jの76-15、80-8、91A-5、IV-pの88-2がある。C型土師器のうちIV-iの119-8、IV-jの76-7、80-7は同類型とみなされ、深い器形で丸味を帯びた平底を持つのが特徴である。この類型は有吉遺跡の内部で生み出されたものではないが、周辺の既知の遺跡においても系統を明らかにすることはできない。またIV-fの179-5、IV-jの76-10、91A-4、IV-iの118-8は外来類型で、前節で紹介したように(第11図)、大厩遺跡で展開された須恵形土師器の系統を引き継いでいる。187-3も等しく外来類型であるが、その系統の変遷は椎名崎遺跡において克明にたどることができる(第13図)。この場合の祖型は小形丸底埴形土師器の退化形態であり、それがさらに特徴を失いながら椀形化していく過程で須恵器の影響を受けて偏平なC型土師器に変質していったことが知られよう。さらにIV-pの88-3・4は前節で示したように(第10図)、本遺跡の58A号跡においてB型土師器からの系統の変遷をたどることができる。

本期の集落構成は次のように類別できる

IV-α……底部が深く立上がり部が短く直立する身形C型土師器を主体的に出土する住居跡
(IV-p)

IV-δ……土師器では身形B型土師器のみ出土する住居跡 (IV-o)



第13図 C型土師器の生成過程(4)
—椎名崎—

IV-ε……口縁部が外反する蓋形C型土師器またはそれに類縁的な蓋形B型土師器を主体的に出土する群 (IV-e・f・j)

IV-(h)……肩部の稜を失った蓋形B型土師器を主体的に出土する群 (IV-i)

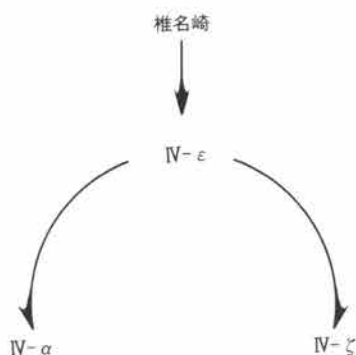
IV-αは特徴的な身形C型土師器によって58A号跡すなわちIII-αとの系統関係が明らかである。IV-δは前期以来の継続住居跡であるためにIII-δ→IV-δの系統関係となる。IV-εのIV-e・jについてはIV-eの49B-3のB型土師器とIV-jの91A-4のC型土師器を両極として、これらのいずれかまたは中間に属する器形が主体を占めている。両類型は器高が異なるものの口縁部はともに外反し、基本型は変わらない。なおIV-jではこの他の特有な類型として丸味を帯びた平底のC型土師器や手づくね風のD型土師器等が認められ、多彩な土器様相を呈している。IV-fでは179-5、187-4等が蓋形の主体的土器でIV-e・jと共通する要素であるが、この他に身形のB型土師器も比較的多数検出されている。以上のことからIV-εについては蓋形品に着目すれば、III-εとともに大厩遺跡で展開された系統変遷に属しているのでIII-ε→IV-εという系統関係を一応想定でき

よう。IV-ζについては特徴的な蓋形B型土師器の系統が不明であるので、外来集団と思われるがその故地が明らかでない。なおIV-ζにおいても身形B型土師器が2例見られるが、これらは立ち上がり部の処理等から判断してIV-ζ本来の遺物とみなしてさしつかえなからう。

次に土師器の移動状況を観察しよう。IV-αではIV-pの88-2・5が搬入品と考えられる。前者は明らかにIV-εに属するIV-jから、また後者は蓋受け部や立ち上がり部の特徴から同じくIV-εに属するIV-fからの搬入であろう。IV-εではIV-fの187-3が既述のように椎名崎遺跡において系統の変遷をたどれることから、そこからの搬入品と考えられる。IV-ζではIV-iの118-8、119-8があげられ、前者はIV-εのいずれかの住居跡群から、また後者はIV-εのIV-jからの搬入品であろう。以上を要約すれば第14図のようになる。

本期の住居跡群・単独住居跡は蓋形・身形の須恵形土師器のいずれか一方、あるいは両方ともに、須恵器を所有しなくとも製作していたことは明らかである。このことは須恵器が広範に

普及したために須恵形土師器（とくにB型・C型土師器）の製作が一般化したのではなく、須恵器を模倣したB型・B'型土師器をモデルとして再模倣品やその影響を受けたC型土師器が一般的に製作されるようになったことを意味している。その普及過程の具体相は散発的に搬入されるB型・B'型土師器を模倣する場合よりも、B型・B'型土師器を伝統的に製作していた集団が分枝して、別個の台地上に移住することを通して、須恵形土師器の量的比率を次第に増していった場合の方が圧倒的に多かったことが今までの分析から推定される。その背後には新興勢力の周辺台地への拡散と旧勢力の衰退という政治的動向が深く関係しているであろう。新興勢力の進出に伴い旧勢力の集団構造が破壊されて、自存不能となった小集団が新興集団に「保護」された様子は有吉遺跡においても第II期と本期に見ることができる。



第14図 範疇間の土器移動(第IV期)

さて諸範疇の動向については α 系の減少と ϵ 系の増加が顕著な現象である。IV-Pは台地上最後の α 系単独住居跡であり、それが ϵ 系のIV-jに取り込まれた立地を示し、さらにこの両者間に土器の移動が介在することから両者間には姻戚関係が存在していたことが想定される。これらの点においてIV-PとIV-jの関係はII- β のII-jとII- α 諸群との関係と全く等しい。このことはとりもなおさず α 系が衰退してIV-Pが自在不能に陥り、 ϵ 系のIV-jの保護下に措かれたことを意味している。II-jとIV-Pは奇しくも範疇系の最後の単独住居跡となっている点まで一致している。台地上で展開される範疇系史の典型的な末期形態の一例とみなしてさしつかえなかろう。

一方 ϵ 系は本期には複数住居跡群で構成される唯一の範疇となる。範疇間の土器の交流においても台地上の中核的存在となっている。それではIV- ϵ 内部で首長制の存在は確認できるであろうか。II- α 同様に範疇内の土器の移動が目安となるであろう。しかしさきの分析ではIV- ϵ 内部の土器の移動は認められず、B型土師器やオリジナルなC型土師器を一元的に範疇内に供給している住居跡群は存在しない。IV- ϵ から主体的に検出されるC型土師器は、それによってIV- ϵ の共同体としての連帯が確認されるという意味において、II- α から主体的に検出され

たA型土師器に等しい分析価値を持つ。首長制に関するII- α とIV- ϵ の根本的な相違はともに共同体的連帯を表現する主体的土器類型を持ちながら、一方では範疇内部での一元的搬出とその製作にたいする統制を読み取り得る土器類型が存在し、多方ではそれが不在であるという点に尽きている。IV- ϵ の主体的土師器は外来類型に属し、前期同様大厩遺跡にその故地を求めることができる。かれらの首長も彼地であって、有吉遺跡の同胞を遠隔操作していたと考えられる。

IV- ϵ に認められるこのような首長群の不在は、それに属する各群の個性化現象に最もよく反映されているであろう。すなわちIV- ϵ に共通する土器類型以外にIV-fでは身形B型土師器を、またIV-jでは深手で平底風のC型土師器およびD型土師器を各々個有類型として所有している。このことからII- α を比較した場合、範疇内部の土器製作に関わる情報伝達経路に違いが見られることは明らかである。両範疇の主体的類型については、等しく首長群が介入しない各構成群独自の伝達経路が認められる。そのことはとりもなおさず各構成群の首長群にたいする主体性の強化を意味している。そのことは同時にまた、範疇を構成する住居跡群間の連帯が弱められ、各住居群の個別的な主体性が強調される傾向を促進するであろう。すなわち、兄弟結合を中心として、せいぜい従父兄弟までを取り込んでいるに過ぎない第1次の親族共同体が独立的な社会集団への胎動を始めたことによって、再従父兄弟をも含み込んだ広範な親族組織で構成されていた伝統的な第2次的親族共同体の基盤が明らかに崩壊の兆しを見せ始めたのである。この現象が本期において首長群が同一台地上に共存する構成群にもあてはまるものか、それとも首長群とは異なる台地上に植民した構成群にのみ認められるのかは残念ながら不明である。

範疇間の土器の移動については先述のようにIV- ϵ が中心的存在となって周囲の範疇と姻戚関係を結んでいたことが知られる。しかしIV- δ との交流の認められないことは、IV- ϵ が台地上の居住権を完全に掌握しきっていなかったことを意味し、さらに土器移動の方向がIV- ϵ からの一方的な搬出となっていることは、IV- ϵ が姻族にたいして階層的上級者としてはふるまっていなかったことを示している。これらのことからIV- ϵ が多数の住居跡群を包摂した大規模範疇であるにもかかわらず、台地上における諸他の範疇にたいする政治的影響力が必ずしも大きくはなかったことが理解される。

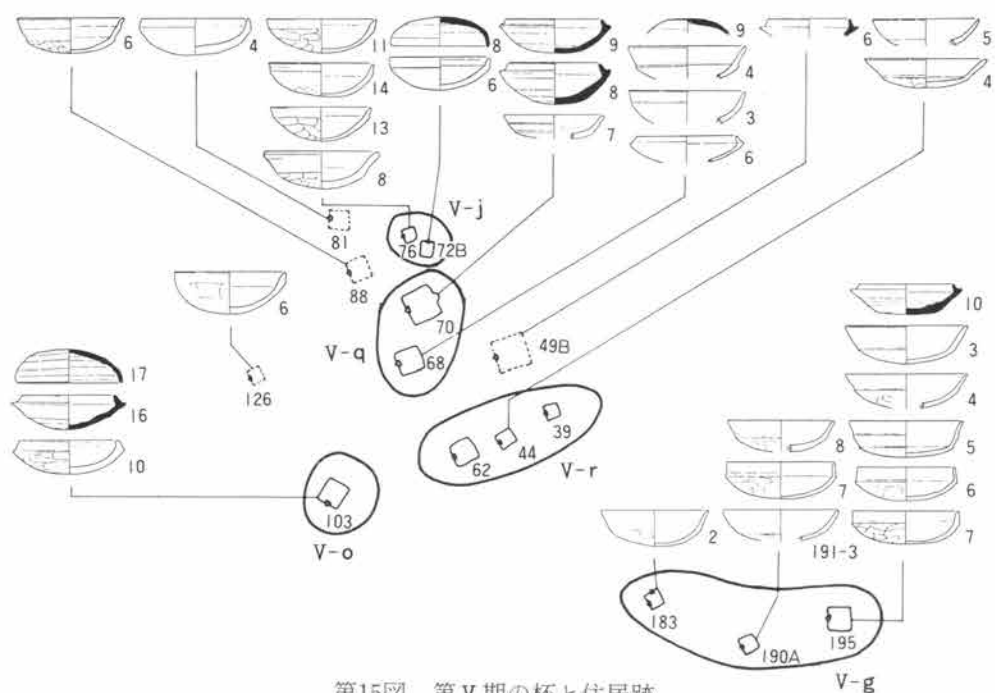
最後に各住居群・単独住居跡の前期以来の出自について確認しておきたい。まずIV- α のIV-Pについては、その主体的土器類型が58A号跡で系統的に変遷した身形須恵形土師器の最終形態と一致するので、58A号跡の後裔とみなすことができる。またIV-Pは第1期以来ひき続いた α 系の最終住居跡でもある。

IV- δ のIV-Oは前期以来の継続住居跡でIII-O \rightarrow IV-Oの系統関係は明らかである。IV

—εのIV—fは占拠地点が若干ずれるものの、土器様相の系統性からみてIII—gの後裔としてさしつかえなかろう。IV—e・jについては各々先行期のIII—e・nの占拠地点に近接または重複しているが、土器様相からはIV—fや大厩遺跡との関係が深い。III—gの派生集団か、もしくは大厩遺跡からの新たな移住民と考えられる。

IV—εのIV—iは外来の新群であるが、その故地は不明である。IV—jとの立地上の近接性を考えれば、両者間に土器の移動が認められるので、姻戚関係を通して、IV—jの保護下に入った集団かもしれない。

(5) 第V期 (第15図)



第15図 第V期の杯と住居跡

須恵器杯は蓋・身ともに前期よりも口径が小さくなる。蓋の天井部と体部の区別は不明瞭となり、身の立上がり部は矮小化して内傾度が強くなる。陶邑ではII型式第5段階に相当する。実年代は600年前後を中心に6世紀末葉から7世紀初頭に及ぶと考えられる。

本期の集落構成は5群の住居跡群・単独住居跡からなる。各群の土器様相は〈須恵器+B型+C型〉タイプ2例、〈須恵器+B型〉タイプ1例、〈C型〉タイプ1例となっている(第6表)。本期の特徴としては殆どの住居跡群から検出される程に須恵器が普及していること、C型土師器がB型土師器を凌いで多数検出されること等があげられる。

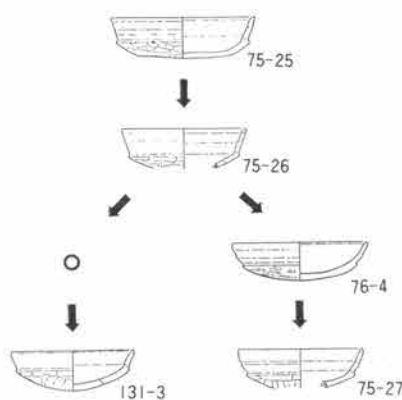
C型土師器には蓋形としてはV—gの190A—8、191—3、195—3・4・5、V—jの76—

8、V-qの68-3・4、70-7、V-rの44-4・5等がある。これらは次のように分類できる。

- ① 天井部と口縁部との境が稜をなし、口縁部が直線的に大きく開くタイプ(V-gの190A-8、195-3・4、V-jの76-8、V-qの68-3・4、V-rの44-4)
- ② 平坦な天井部を持ち、二段口縁となるタイプ(V-gの195-5、V-qの70-7)
- ③ 全体に丸味を帯びた器形で、天井部と口縁部との境が沈線となるタイプ(V-gの191-3、V-rの44-5)

第6表 住居跡群の土器様相(第V期)

	須恵器	B 型	C 型
V-g	○		○
V-j	○	○	○
V-o	○	○	
V-q	○	○	○
V-r			○



第16図 C型土師器の生成過程(5)
—椎名崎—

これらはいずれも有吉遺跡で系統的に成立した類型ではなく、外部で製作された後に搬入されたものとみなすことができる。①と②は系統的な近似関係にあることが椎名崎遺跡の資料から明らかになる(第16図)。すなわちこれらの祖型は平坦な天井部と長い口縁部を持つ蓋形B'型土師器(75-25)に求められる。まずその天井部が丸味を帯び(75-26)、それからさらに口縁部が漸移的に短くなるもの(131-3)と、長い口縁を保ちながら二段成形の跡を明瞭化させていくもの(75-27)という同一出自の2系統のC型土師器に分化していくと考えられる。有

吉遺跡の①タイプは前者のヴァリエーションで椎名崎131-3の前段階に位置し、②タイプは後者の直系で並行あるいは後続段階に位置している。また③タイプは先に図示したように(第13図)、これまた椎名崎遺跡で系統的な変遷を跡づけることができる。なお有吉、椎名崎両遺跡の他に、①タイプの類例には木戸作遺跡20-3・4、ムコアラク遺跡37-19等があり、③タイプ

の類例にはムコアラク遺跡37-18がある。

一方身形のC型土師器としては190A-7、195-6・7等V-gに限って検出される。この類型は立上がり部がこの時期のものとしては、異様に長い点に特徴がある。形態上の系統関係は不明である。ムコアラク遺跡27号跡からはこの類例が主体的に検出されている。

須恵形土師器の分類に基く各住居跡群・単独住居跡の範疇化は次のようになる。

V- δ ……土師器では身形B型土師器のみ出土する住居跡 (V-o)

V- ϵ ……蓋形B型土師器を主体的に出土する群 (V-j)

V- η ……蓋形C型土師器を主体的に出土する群 (V-g・n・q)

V- δ は前期以来の継続住居跡で、土師器では身形B型土師器のみ出土する点でもIV- δ と共通するのでIV- δ →V- δ の系統関係が明らかである。またV- ϵ の主体的土器はIV- ϵ の主体的土器の口径が縮小したものでIV- ϵ →V- ϵ の系統関係が考えられる。それにたいしてV- η の蓋形C型土師器群は前述のようにいずれも椎名崎遺跡で系統的に生成していることから、V- η は椎名崎遺跡からの転入集団と考えられる。IV- ϵ に認められた複数の個有類型を出土する住居跡群は、本期ではV- η のV-gのみである。V-gは①タイプの蓋形C型土師器と立上がり部の高い身形C型土師器が本来の土器組成と思われる。範疇間の土器移動はV- ϵ のV-jの76-8がV- η からの搬入品とみなされるので、V- η →V- ϵ という移動が考えられる。

本期の集落構成の特徴は大厩起源の ϵ 系が減少し、それに替わって新しく椎名崎起源の η 系が進出して最大範疇となっていることである。また δ 系のV-oは前期以来の単独住居跡で、台地上の他範疇との交流が認められない。このことはV-oがその故地の椎名崎遺跡の母集団との間にひき続き密接な連帯を維持していたことを意味しよう。なお δ 系と η 系はともに椎名崎遺跡に母集団の存在を想定できるが、それらの母集団は彼地にあってもその系統を異にしていたであろうことが、有吉遺跡の分枝集団の土器様相の相違から推定することができる。

次にV- η の首長制について考えてみよう。そのためにはV- η 内部の土器様相の吟味が必要となる。V-gでは①タイプの蓋形C型土師器と身形C型土師器を主体的に出土する他に②タイプの195-5と③タイプの191-3が客体的に共伴している。そして客体的な両タイプは前述のように主体的な①タイプとは生成上の系統を異にしている。したがってV-gにおける②タイプと③タイプは椎名崎遺跡における異系統集団からの搬入品とみてさしつかえあるまい。このことはV- η 中の他の住居跡群にもあてはまるであろう。そこでV- η の各群における①タイプの出土個数をみると、V-gが4個、V-q・rが各1個となりV-gが圧倒的に多くなっている。このことはV-q・rの①タイプはV-gで製作された搬入品か、それを模倣してV-q・rで製作されたかのいずれかを意味している。そのいずれの場合にもV- η 内部の土器移動はV-gからV-q・rへという一元的搬出が想定されるのである。したがって範疇内部の

土器移動の局面からはV-gはV-ηの首長としての資格を持っているといえよう。しかし須恵器の分布状況はこの見解に否定的である。V-η内部の須恵器の分布状況はV-qが3個、V-gが1個となっており、分布の中心は明らかにV-qにある。須恵器についてはV-qがV-ηを代表して外部から一括受容して、あらためてV-η内部に一元的に搬出していたと考えざるを得ない。以上のことはV-ηでは土師器と須恵器の管掌主体が異なっていたことを意味するものであろう。すなわち土師器の製作や普及の統制にはV-gが、須恵器の外部からの受容や普及にはV-qが各々分権的に管掌していたと考えられるのである。

V-ηの台地上における政治的な影響力についてはV-oとの間に土器の移動を伴う婚姻関係が認められないことから、台地上の全面的な居住権を掌握するには到っていなかったと思われる。またV-εとの間にはV-ηの人間がV-εに嫁出する形態の姻戚統合を呈しているが、住居跡群の配置関係からみて、ε系の最後の住居跡群であるV-jは姻戚関係を通して、V-ηのV-qの保護下に入っているとみなすこともできるかも知れない。

なお前期に主要範疇であったIV-εの多くの住居跡群で範疇に共通する土器類型とともに自己の群に特有な土器類型をも製作していたのにたいし、V-ηでそのような傾向が認められるのはV-gのみで、他の住居跡群は従来のあるあり方と変わりないように思われる。土器製作においてIV-εの各群は各々の主体性を発揮していたのにたいし、V-ηの各群はV-gから頒布される器形のコピーを作ることに甘んじていた。このことは首長制の性格とともに範疇の個性を表出したものであろう。しかしその個性は同時に歴史的な形成物でもある。両者とも共同体の基本構造には違いがなかったであろうから、相違の生じる場はかれらを取り巻く親族紐帯をどのように把握していたかという連帯感の性格に求められよう。

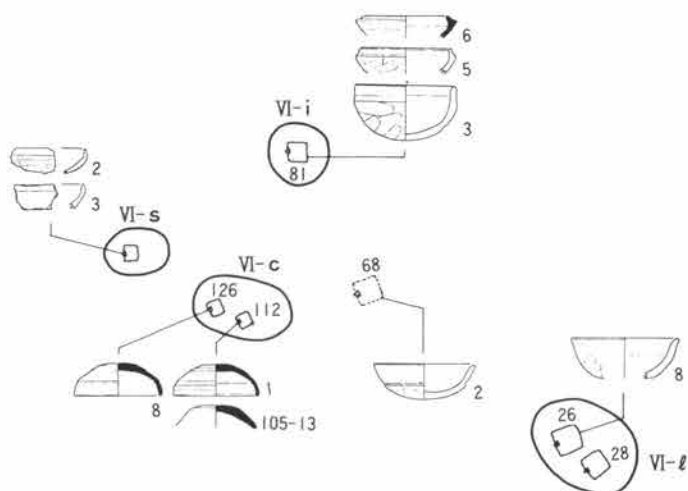
最後に各住居跡群・単独住居跡の前期以来の出自を確認しておこう。V-δのV-oは前期以来の継続住居跡であり、土器様相も前期同様身形B型土師器によって特徴づけられるのでIV-o→V-oの系統関係は明らかである。

V-εのV-jはその中の76号跡が前期以来の継続住居跡であり、土器様相もIV-ε→V-εという系統が認められるので、IV-j→V-jの系統関係が確認できる。

V-ηの諸群はいずれも椎名崎遺跡から移入した新群であるが、さきに移入し定着しているδ系とは系統を異にしている。

なお先述のようにムコアラク遺跡の27号跡にはV-gに特有の身形C型土師器が主体的に存在することから、両住居跡がごく近親な関係にあることが知られる。ムコアラク遺跡が本期より開始されることを思えば、ムコアラク27号跡の住人は有吉V-gからの派生集団で彼地における初期の開拓に尽力した人々であったことが考えられる。

(6) 第VI期 (第17図)



第17図 第VI期の杯と住居跡

須恵器杯は合子形をとる最後の段階である。蓋・身ともに口径が最小になる。蓋は天井部がへら切り無調整のため平坦面が形成され、全体として碗形を呈する。身は立上がり部がさらに内傾し、蓋受け部より僅かに高い程度に短くなる。陶邑ではII型式第6段階に相当する。実年代は630～40年代を中心とした時期が考えられる。

本期の集落構成は4群の住居跡群・単独住居跡からなる。各群の土器様相は〈須恵器+B型+C型〉タイプ1例、〈須恵器〉タイプ1例、〈B型〉タイプ1例、不明〈VI-s〉1例となる(第7表)。須恵器のみで構成される住居跡群(VI-c)が存在すること、C型土師器の形態上の変異が乏しくなったこと等が特徴的である(第7表)。

第7表 住居跡群の土器様相(第VI期)

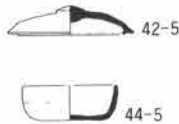
	須恵器	B 型	C 型
VI-c	○		
VI-i	○	○	○
VI-l		○	
VI-s			

C型土師器はVI-iの81-3に限られる。この資料は同時期の須恵器・B型土師器に比べ、

立上がり部の傾斜度や底部の深さ等に形態的特徴が現われている。周辺遺跡の類例は現在までのところ見当たらず系統関係は不明である。

本期は資料数に恵まれないこともあり、各群の主体的土器や土器の移動状況等に不明な点が多く分析はきわめて困難である。各群の前期以来の出自についても明言を避けざるを得ないが、本期各群の土器様相には前期の土器に系統的に連なるものの認められないこと、また各群の立地が前期とはずれており重複するものが見られないこと等から、本期諸群は前期諸群とは系統を異にするものと考えられる。

(7) 第Ⅶ期 (第18図)



第18図 第Ⅶ期の須恵器
—ムコアラク—

有吉遺跡には該当する資料は存在しない。村田川下流域における本期の示準的な須恵器はムコアラク遺跡から出土している(第18図)。蓋(42-5)は偏平な擬宝珠状のツマミと、口唇部より下に延びる頑丈なカエリが付されている。身(44-5)は平坦な底部から、体部が内湾ぎみに直立する器形である。蓋・身とも前期の小口径を受け継いでいる。陶邑ではⅢ型式第1～2段階に相当する。実年代は660～70年代を中心とした時期が考えられる。〈古墳時代〉と呼び得る最終段階であろう。

4. 結 論

後期古墳時代の有吉遺跡の集落を7期に分けて論述してきたが、ここではその過程で生じた諸問題を、(1)時期区分、(2)移住、(3)首長制および共同体の3項目に即して総括しつつ、若干の展望を与えてみたい。

(1) 時期区分

200年にも及ぶ後期古墳時代を7期に区分したのは専ら杯形土器の年代観を尺度にとった編年作業によるもので、それを通して把握された時間の経過を〈歴史〉として反芻するためには、その編年に依拠しながらもいっそう〈人間〉に接近していかなければならない。

そこで視点を土器から人間生活に移して時期区分を再考すれば第8表のようになるであろう。すなわち後期古墳時代の有吉遺跡で営まれた人間の生活用式は古期(第Ⅰ・Ⅱ期)と新时期(第Ⅳ・Ⅴ期)に大別される。両期の終末には人口が激減する過疎期(第Ⅲ・Ⅵ期)が各々控えており、第2次の過疎期の後には一時的な無人期が訪れるのである。

第8表 有吉遺跡の時期区分

第Ⅰ期	古 期
第Ⅱ期	
第Ⅲ期	第1次過疎期
第Ⅳ期	新 期
第Ⅴ期	
第Ⅵ期	第2次過疎期
第Ⅶ期	無人期

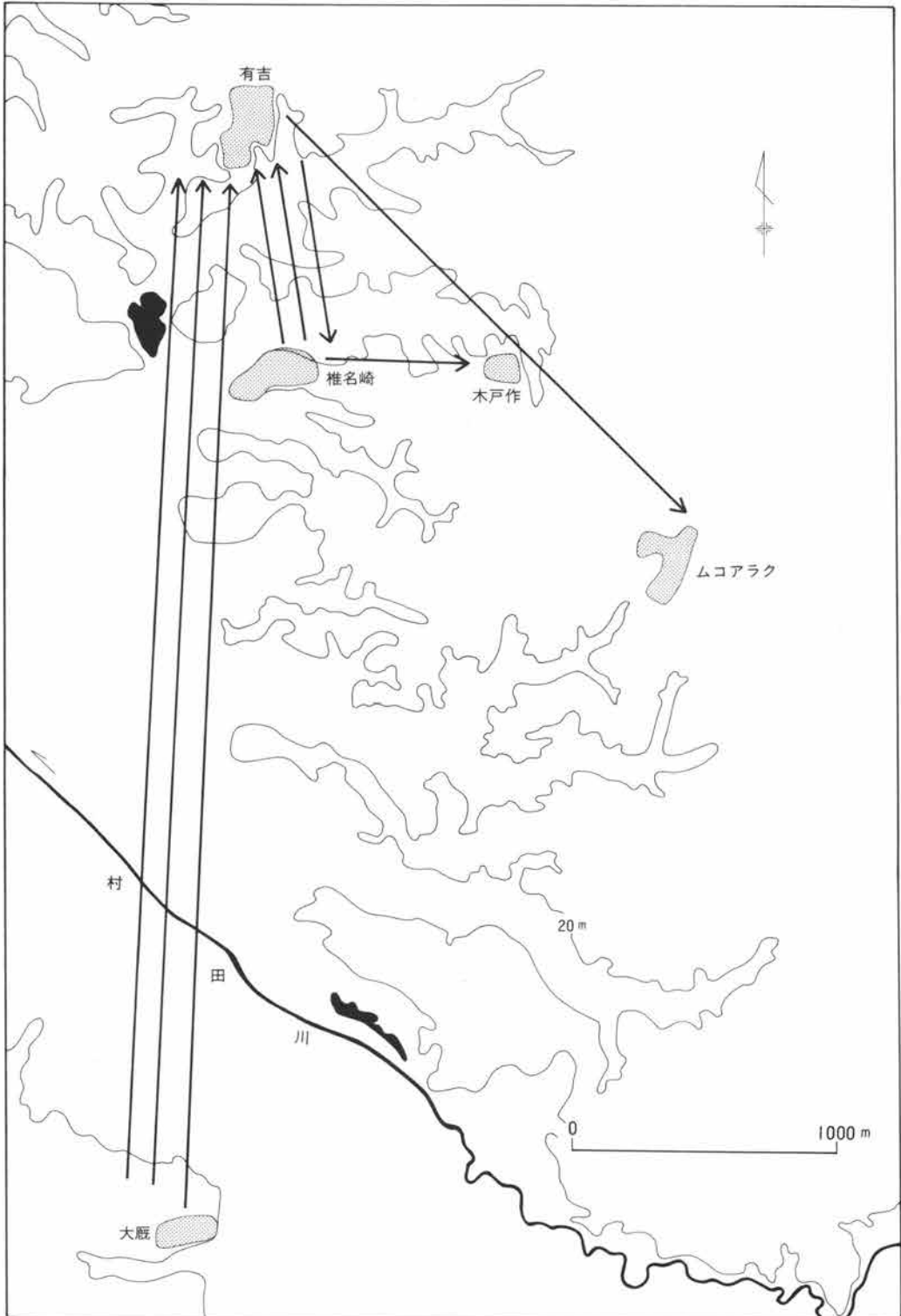
古期と新期の内容の相違を最も端的に反映するものは住居跡の継続期間である。第Ⅰ・Ⅱ期を継続して営まれた住居跡は7基存在するのにたいし、第Ⅳ・Ⅴ期を継続して営まれた住居跡は2基にとどまっている。このことから古期に属する住居跡の方が一般的に新期のそれよりも継続期間が長かったと考えてさしつかえあるまい。古期と新期の竪穴住居跡の基本構造に相違が見られない以上、その理由を物理的諸条件に帰すことなく、各時期の歴史的特徴として把握すべきである。言うまでもなく住居跡の継続期間が長いということは定住性の強さを表わし、

短いということはその逆を意味している。したがってそのことから、古期には移住の機会が少ない安定した生活様式が、また新期には移住の機会の多い不安定な生活様式が卓越していたことが推定される。さらに移住の社会学的原義を想起すれば、それは首長制や共同体のあり方に甚大な影響を及ぼさずにはおかないであろう。移住とは今まで生活をともにしていた人々の一部が別離することであり、その一方で未知の、あるいはそれに近い人々との新しい共同生活が開始されることである。古期の首長制や共同体はこの現実に対処すべく自らを変容させながら新期に移行していったと考えられる。

(2) 移 住

前章で確認された有吉遺跡を中心とする移住例を集成したのが第9表である。また第19図はそれを図化したものである。各遺跡について同様な分析を行えば方向線の数にはさらに増加して複雑な錯綜状況を呈するようになることは明らかである。ここに登場する集落跡は大厩遺跡に弥生時代の住居跡が見られる他はすべて後期古墳時代に開始期を持っているので、村田川下流域の主要部分がこの時期の活発な移住現象によって開発されていったことが理解される。

移住の実態について考える際に第9表はある程度の手がかりを与えてくれるが、分析の方法上知り得ない部分が不可避免的に生じてくる。すなわち有吉遺跡への移入については比較的明瞭に確認できるが、有吉遺跡からの移出については周辺遺跡の同レベルの分析を待たなければその客観的把握が比較的困難であること、さらに単一の集団が複数地点に分散移住していた場合も考えられるが、有吉遺跡のみの分析ではその把握が一面的にならざるを得ないこと等を注意事項としてあげることができる。第Ⅲ期の椎名崎から有吉および木戸作への移住は、応急的



第19図 有吉遺跡を中心とする移住例集成

に知り得た後者の実例である。これらの限界は周辺集落跡の精力的な分析を通して克服されなければならないであろう。

第9表 有吉遺跡を中心とする移住例集成

時 期	移 住 方 向	移 住 規 模
第Ⅰ期	不 明→有 吉	不 明
	大 厩→有 吉	住居跡群×1
第Ⅱ期	有 吉→椎名崎	不 明
第Ⅲ期	椎名崎→有吉・木戸作	単独住居跡×2(有吉)
	大 厩→有 吉	単独住居跡×1
第Ⅳ期	大 厩→有 吉	(住居跡群×1)+(単独住居跡×1)
	不 明→有 吉	住居跡群×1
第Ⅴ期	椎名崎→有 吉	住居跡群×3
	有 吉→ムコアラク	不 明
第Ⅵ期	有 吉→不 明	不 明

以上の限界を踏まえながらも今回の分析は後期古墳時代の移住の実態に関する重要な一般的傾向を抽出していると考えられる。まず第1に移住の方向性には特定傾向が認められず、移出入いずれとも殆ど無秩序裡に行われていたと推定される。居住に適した諸小台地が安定した政治勢力の影響下に長期間置かれていれば、移住頻度は分析成果よりもかなり小さくなると思われる。またそのような状況下で移住が行なわれていたとしても、それは管理の行届いた形態をとり、同一勢力内部においても異なる勢力間においても、特定台地間で行われる可能性が高くなるであろう。このことは台地上における居住権がまだ政治の対象物とはなっておらず、人々は任意に移住することができたことを意味している。移住しようとする台地が未開地であれば、自力で開発しさえすれば無条件で居住が可能となり、先住者がいる場合はかれらとなんらかの調停をした後に居住したのであろう。今回の分析でも新参集団は既存集団と婚姻関係を結び姻族連合体を構成していたが、そのような手続きを経た上で既存集団と同一台地上での共住生活を開始されたと考えられる。この場合はしばしば新参集団が既存集団に婚姻配偶者を提供していることは、第三者との共同生活の代償とみなされる点で興味深い。

移住の一般的傾向の第2点は、移住集団が小規模な点である。3～4基の住居跡群が単独に移住する場合が最も多く、単独住居跡の移動がこれに次いでいたと推定される。第Ⅴ期に現われる椎名崎から有吉への移住が、3個の住居跡群を含んだ第2次の親族共同体の規模で行われ

たのはむしろ例外に属している。単独住居跡の移住者の中には、既に移住した親族や婚姻関係を結んでいる姻戚の保護を求める自在不能者が数多く含まれていたと考えられる。このように移住集団の規模が小規模でせいぜい第1次的親族共同体程度であったということは、当時の農業生産様式が分節的な性格を持ち、第1次的親族共同体が単独で開墾・栽培・収穫を行うことが可能で、しかもそれだけの人数を養う程度の生産量が一応は見込まれていたことを意味する。当時の主要作物は水稻であったと考えられ、その生産の場は集落立地の点からみて舌状台地に挟まれた小谷津であったと思われる。このような小谷津の発達した地域では、谷津毎に水系が独立し、狭小な地形に合わせて水田区画を設定せざるを得ないので、水田経営体が谷津毎に分散する傾向が強くなる。移住者は移住先の未墾地部分を開発し、同一谷津内に既墾地があれば、その経営者と水利や水田区画について協議した後に、第1次的親族共同体の労働力にふさわしい小規模面積の水田経営を開始したのであろう。

最後にこのように頻繁に行われた移住の要因について考えてみよう。それが自己の水田経営と深く関わりを持つことは確かであろう。しかし、移住の方向性が無秩序で、計画性がならぬ認められないことから、この移動が一部で説かれているような共同体規制に基く水田の割替慣行であると考えすることはできない。この移動は自発的にまた計画的に行われたのではなく、あくまで突発的で、余儀なくされた結果として現われている。そのような情況にふさわしい要因として第1に想起されるのは自然災害や天候不順による水田の荒廃化である。しかし、すべての移住の要因をそれに帰すことは不可能であり、さらに古期に比べ新期の移住頻度が高くなるという現象をそのみでは説明することはできない。やはり人間が登場する課題として歴史的に解明すべきではなかろうか。

村田川下流域では現在のところ後期古墳時代の前半に始まる集落跡よりも後半に始まる集落跡の方が分布密度が高く、後期古墳時代の後半に集落跡が増加することが知られている。台地上の集落跡が増加すれば、当然のことながら台地下の小谷津の水田化が進行し未墾地の比率が減少して、相異なる経営体が間に未墾地を挟まずに境を接して耕作する状況が発生するのであろう。ひとつの谷津に多数の経営体が参加している場合には、あらためて水利や水田区画の調整を行う必要が生じてくる。その際に従来よりも不利な条件になった場合には、新たに未墾地を開発した方が得策となることが少なくなかったのではあるまいか。開発の進んだ谷津の生産力が飽和点に近づき、増加した人口を養いきれなくなったときに、具体的には上記のような過程を踏まえて移住が行われたのであろう。このように考えれば、有吉遺跡を含めて古期に開始される集落跡が形成された主要な契機は、5世紀中葉までに村田川沿岸のより上流地域での水田開発が進展した結果、伝統的な可耕地の生産力が増大する人口にたいして限界に達したために、未墾の可耕地を求めて下流地域に移住植民しようとする傾向が顕著になったことによるも

のと推定される。

(3) 首長制および共同体

有吉遺跡の住民はその開発当初から、 α 系・ β 系・ γ 系という3つの異なる親族集団から構成されていた。その主要部分は α 系と β 系との姻族連合体であり、 γ 系は α 系との姻戚関係を通して台地上に居住していた付随的要素である。この時点では明瞭な首長制の徴証は認められず、移住民はかれらの故地の同胞と強く結びついていたと思われる。やがて第II期になると α 系が優勢を占めるようになり、 β 系は他の台地に移住するか α 系に取り込まれるかして衰退してしまう。 α 系内部では首長制が自生しているのが確認できる。第1次過疎期を経過して第IV期になると大厩起源の ϵ 系が多数を占め、 α 系はかつての β 系同様他の台地に移住するか ϵ 系に取り込まれるかして衰退してしまう。 ϵ 系は第1次的親族共同体の個性が明確に表われる集団で、首長制は確認されない。第V期になると ϵ 系が衰退し、それに替わって椎名崎起源の η 系が台地上の優勢集団となる。 η 系は首長制の徴証が認められるものの、分権的で完全な形態ではない。 ϵ 系・ η 系ともに台地上の他の少数集団と婚姻関係を結び、そこから生じる姻戚結合が台地上の異なる親族集団を結びつける紐帯となっているが、第III期から第V期にわたって存続した δ 系は移入当初を除き単独住居跡となるにもかかわらず、優勢集団に取り込まれずに自活していた。やがて第2次過疎期を経過して、古墳時代の終末には有吉遺跡は無人期を迎えることとなる。以上の記述によって古期は集落形成以来 α 系が優勢集団となる過程、また新时期は異なる親族集団が短期間のうちに相次いで優勢集団となる過程と把握することができよう。

後期古墳時代を通して有吉遺跡には様々な第2次的親族共同体が現われるが、申し分ない首長制を備えていたのは α 系のみであり、その α 系も移入当初は首長制の徴証は認められなかった。このことは移住集団の多くは故地における第2次的親族共同体の部分要素に過ぎず、他の台地への移住当初は故地に所在する首長の政治的統制を強く受け容れていたことを意味する。 α 系が第II期になってから首長制を発展させたのも、移住当初の第I期ではまだ故地の首長の統制を脱し切れないうえにいたためであろう。 α 系が第II期に首長制を実現し得たもうひとつの理由は、 α 系が台地上に多くの第1次的親族共同体を派生させて、第2次的親族共同体としての α 系が大規模化したことがあげられる。集団の構成要素が多数になれば、不可避免的にそれらを調整して集団全体の意志を方向づけ、さらにその集団を代表して他集団と交渉する機能を持つ首長制を必要とするようになる。以上のことから第2次的親族共同体の首長制が存在し得る前提条件は、移住当初から世代交代が行われる程の時間の経過と、それに伴う第2次的親族共同体の大規模化であることが理解される。

一方第1次的親族共同体の首長制については、資料数の多さにもかかわらずその徴証は得ら

れなかった。II—Cが第2次的親族共同体II— α の首長であるにもかかわらず、その構成単位となる各住居跡——世帯共同体が殆ど均等に須恵器を分有している状況は、第1次的親族共同体を構成する各世帯共同体が、比較的平等な立場で結合していたことを暗示している。そのことはとりもなおさず当時の在地社会にあつては、基本的親族関係において垂直的な親子紐帯よりも、水平的な兄弟紐帯の方が優先されていたことの反映に他ならない。この段階から中世的な家父長制家族に移行する道程は、まず兄弟紐帯から親子紐帯の優先に切り換えられ、さらに直系・傍系の識別が確立され、その過程で妻の地位の低下が徐々に進行するという長い径路を歩まねばならない。親子紐帯よりも兄弟紐帯が優先されたのは、当時の在地社会全般において生産技術が低劣で、富の蓄積が未熟な段階にとどまっていたためであり、生産に必要な成年男子の労働力を確保するためには、兄弟結合を中核とする水平的な同世代の親族的連帯が不可欠であったのである。

これに関連して第1次的親族共同体の第2次的親族共同体にたいする自立性を検討するためには、移住単位となる集団の規模の考察が大きな手がかりとなる。移住の単位となるのは3つの第1次的親族共同体を含む第2次的親族共同体の例もあるが、多くの場合は単独の第1次的親族共同体や世帯共同体であり、古期の当初になされた集団規模よりもおそらくは小さくなっているだろう。前者は移住先でも耕地にさえ恵まれれば自活し続ける場合も少なくなかったが、後者については故地において第1次的親族結合が破壊されて自存不能に陥った世帯共同体が、既に移住している親族の後を追ったり、姻族を頼りに移住したものと思われる。移住単位のこのような小規模性は、分離する員数を最小限に喰い止めようとする第2次的親族共同体の意志が動いたことによるものであり、移住前から第1次的親族共同体に自立性が備わっていたことを示す材料は得られない。第1次的親族共同体の自立性は移住先での孤立した厳しい生存環境を克服する過程で次第に培われていったのであろう。したがって同時期ではあっても、首長が所在する伝統的な第2次的親族共同体に含まれる第1次的親族共同体と、移住先で形成された第2次的親族共同体に含まれる第1次的親族共同体とは、その自立性において質的に異なる点が認められたとしても不思議ではないと考える。言うまでもなく次代の歴史を拓くのは後者であり、前者は残存形態を長くとどめながらもやがて歴史の表舞台からは姿を消してしまうのである。

最後に有吉遺跡で認められた、〈古代集落〉という社会的断片の構造変化の意味を、村田川下流域という地域社会の広がりの中で考えてみたい。上流域で水田開発が進行した結果、増加し続ける人口が可耕地の生産力を凌駕するに到ったために、上流域の農耕民は良好な可耕地を求めて下流域に移住し始めた。これが古期の発端である。古期は可耕地の水田開発がまだ十分に進展せず、移住頻度もそれに対応した低率にとどまっていた。移住民は長期にわたる定住期間

に恵まれ、その間に首長制が自生し、発達する余地が充分にあった。移住当初の集団関係はよく保たれ、各々の台地上では比較的孤立的な生活が展開されていたと考えられる。それが第Ⅲ期を迎えると、古期の発端と同様な契機から、その当時は手をつけなかった次善の可耕地に進出が開始され、以後古墳時代の終末まで移住が頻に行われる流動的な時期が継続するのである。このような状況下では、台地上の住民の出入りが激しくなり、開発の進んだ地域ではそれに伴って水利や水田区画を再調整する機会が増加する。それらをめぐって時には親族集団間の協力関係が損われ、闘争にまで発展する場合も少なくなかったであろう。第Ⅲ期に α 系が激減し、その首長制が消滅するのは、このような耕地をめぐる親族集団間の闘争の結果であると考えられる。 α 系の末路は耕地をめぐる近隣の親族集団との闘争に敗れた結果、伝統的な耕地を奪取され首長制が崩壊して、旧構成員はその一部が同一台地上の他集団に取り込まれ、多くは第1次の親族共同体を単位として他の台地に移住していったのであろう。新期はこの地域の群集墳造営がきわめて活発化する時期でもある。その中には言うまでもなく、刀剣類や鉄鏃等の鉄製武器類が豊富に副葬されている。これらの武器類の一部はこのような闘争にも使用されたのではあるまいか。

参考文献

- 種田斉吾・阪田正一『有吉遺跡（第1次）』（『千葉東南部ニュータウン 3』）（1975）
種田斉吾・阪田正一『有吉遺跡（第2次）』（『千葉東南部ニュータウン 5』）（1978）
栗田則久他『バクチ穴遺跡・有吉遺跡（第3次）・有吉南遺跡』（『千葉東南部ニュータウン 14』）（1983）
三森俊彦他『市原市大厩遺跡』（1974）
三森俊彦・阪田正一『木戸作遺跡（第1次）』（『千葉東南部ニュータウン 2』）（1975）
上村淳一『椎名崎遺跡』（『千葉東南部ニュータウン 6』）（1979）
田坂浩・相京邦彦『ムコアラク遺跡・小金沢古墳群』（『千葉東南部ニュータウン 8』）（1979）
田辺昭三他『陶邑古窯跡群 I』（1966）
中村浩他『陶邑 I』（1975）
中村浩他『陶邑 II』（1978）
中村浩他『陶邑 III』（1978）